
エスタディア - 月に照らされた世界 -

CFF-沙希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エスタディア 月に照らされた世界

【Nコード】

N 7 6 3 3 N

【作者名】

C F F - 沙希

【あらすじ】

私立夢見高校に通う3年生、月影^{つきかげ}幻夜^{げんや}は、夢の中で突然謎の光に包まれ、異世界エスタディアに飛ばされる。そして、そこでいつの間にか幻夜は魔族を統べる王、つまり魔王となっていた。同じ頃、夢見高校3年生の暁陽^{あかつき}志^しも寝ている間にエスタディアへと飛ばされていた。そこで彼は世界を救う勇者として、人々から祭り上げられた。エスタディアにはいくつもの種族がいるのだが、その中でも大きな勢力を誇っているのが人族と魔族であった。この二つは昔からいがみ合い、憎しみ合っていた。つまり、魔王と勇者は宿敵同士。

何の捻りもない。ただ一つ、幻夜と陽志が親友であることを除けば……。そんな異世界ファンタジー！

第0話 魔王と勇者（前書き）

正直、私は凄く忙しいので、更新スピードがかなり遅くなるかもしれません。

本当に申し訳ありません。

第0話 魔王と勇者

L o r d P h a s e

誰もがご存じであるように、月は光らない。

月は太陽の光を反射して光っているにすぎない。

自らでは輝くことが出来ない悲しい存在。

太陽さえなければ、存在すら目視できない儚い存在。

月が照らす世界を考えてみたのだが、それは所詮妄想にすぎず、現実にはあり得ない。

しかし、それは我々の常識の範疇であり、真実など無限に存在する。例えば我々が受け入れ難い事象が目の前に真実として存在するならば、それは真実なのである。

この世には、非常識な事柄が多数存在する。たとえば、今の俺の状況みたいに。

「お目覚めのようね」

「……」

目が覚めたら、目の前に外見年齢でいえば三十路前ぐらいと思われる女性がいた。

だが、人間の割に耳が長いことが特徴的であり、咄嗟にこれは夢だと直感した。

どうやら自分もこんなファンタジックな夢を見ることがあるらしい。大学受験がもうすぐ迫っているからか、相当余裕が無いようで、無意識に現実逃避に走っていたようだ。

情けないと言えば情けないのだが、夢の登場人物で最初に出てきたのが三十路前の女性ってどうよ？ とか思ったりする。

愛に歳の差なんて関係ないとは思ってはいるが、もう少し若い女の子が自分的には好みなのだ。

それとも、自分のストライクゾーンは30前後なのだろうか？

別段それでも構わないのだが、今はどういう状態なのか確認をしておく。

「ここは一体どこですか？」

「そうね……魔王城の地下室といえいいのかしらね」

「魔王城……」

随分とファンタジックでファンタスティックな展開で、しかもありがちだ。

俺は二、三度瞬きをした後、自分の姿を確認する。

「え……！？」

俺は、「一糸纏わぬ姿」であつた。

何故強調した？

いや、でも、何も着ていない……妙齡の女性の目の前で何も来ていない素っ裸の俺。

俺って変態だつたのか……ということはこれは淫夢ということになる訳だな。

まあ最近は勉強、勉強でいろいろそっちの方はご無沙汰であつたのだが、これは一体どういう訳か。

「じー」

しかも女性は俺のことをじっくりと観察しているようだし、これはアレだ。夢だからOK的なアレだ。

別に押し倒しても構わないだろ？と悪魔が囁く。

いやいや、誠実に生きるって決めただろ？と天使が囁く。

いや、いつ決めたんだよと悪魔が反論する。

全くその通りだ。

天使はそれもそうかと納得する。

納得するんですか！？と俺は自らの良心にツッコミをかましてみる。

いや、こんなことをしている場合ではない。話が全く進まないし、見えないではないか。

とりあえず、夢の続きでも見ることにする。

「あの、えーと……とりあえず服を着たいんですけど」

「あら？ 若い男子はこの状況で据え膳食べると思っただけれど？」

「それでもいいんですけど、何か話が見えないので」

「それもそうね」

女性は手を叩いて部下の男を呼び寄せ、服を持ってこさせた。

今気が付いたのだが、この場には俺の他にも複数の人間がいた。いや、人間の割にはみんな変わった外見をしているのだけれども。

もし襲いかかっていたら、公開処刑状態になっていた。危なかった。その中に見知った顔がいたのであるが、それを確認する余裕などないため、この場では論じないことにする。

「何か偉そうな服ですね。まるで魔王みたいな」

「魔王だもの」

「は、い？」

俺の問いかけににつこりと笑顔で返す女性。

今の言葉が本当であるならば、俺は今日から魔王ってことになるらしい。

まあ夢なので、そんな展開があってもおかしくは無い。

ただ一つ驚きであったのは、自分に魔王願望があることであつた。

夢は人の願望をあらわにする。

普段超自我に抑えつけられている人間のイドという部分が、直接脳に働きかけてきているらしい。

普段言えないような事や、普段出来ないようなこと夢が叶えてくれる。

不思議なポツケが無くとも、あんな夢やこんな夢を夢が叶えてくれる。

夢が夢をかなえるというのもおかしい話だ。

あーいや、話が逸れ始めている。

「俺、魔王なんすか？」

「そうよ」

妙に笑顔で断言するこの女性。

まるでこの時を何十年も待ちわびてきたような顔だ。

まてよ。この女性ってまさか100歳以上とか、そういう設定何だろうか。

俺は途端に恐怖を感じた。

最近の風潮的にあり得ない話ではないのだから。

「とりあえずあなた……魔王様には戴冠式をやってもらっわ」

「戴冠式……」

カール大帝とかのアレだ。

百年戦争のシャルル七世とかのアレか。

正式に王になるイベントのことか。

「私の言う通りにすればいいから」

俺は壮大で優美、しかし華美ではない服を身に纏い、頷いた。

よく分からないが、彼女の指示に従っていればいいようなので、従うことにする。

思えば、早く気が付くべきであったのだが、俺のステレオタイプに縛られた頭では、このとき思考するのは不可能。

完全に考えることを止めてしまい、デカルトで言うところの存在意義を達成できない状態だ。

まあ確かに人間の存在意義を達成する必要などないのではあるが…

…魔王だし。

そうして俺は彼女の指示に従い、様々な儀式みたいなものを済ませていく。

詳しく語りたいのは山々なのであるが、余りにも多く、そして複雑であり、人間には理解しがたいものが多分に含まれる式典……怪しげな儀式であったので、割愛にしておく。

「これより戴冠式を終了する！」

女性が杖を高々に上げる。

それと同時に雷が俺の身体に降下した。

「グガア！！」

余りにも突然の出来事に、俺は驚愕し、余りの痛みに叫んでしまう。全身に駆け巡る痛みは、俺をその場に蹲らせ、さらにのたうち回りそうになる。

だが、考えてみれば、雷を避雷針のようにまとも浴びて、何故意識があるのだろうか。

俺は痛みの中にかすかに存在した、冷静な理性で疑問に思う。しかし、その答えはすぐに明らかになる。

痛みは徐々に減少し、自分の左胸と両目の部分に収縮される。

夢の癖に、どうしてこんな苦痛を浴びなくてはいけないのだろうかと思うのも束の間、俺は自分の左胸に刻まれた刻印を、まだ痛みが消えぬ両目で確認した。

「こ、これは……？」

「魔王の証でございます」

女性 は 淡々と、しかし丁寧 に 述べた。

「私、魔王軍参謀、さらに魔王様の副官のラミア・スタットフォー
ドと申します」

女性 は 初めて俺の前に 跪き、自己紹介をした。

痛みが引き、頭も冴えてきた俺は冷静に周りを見る。

いつの間にか、みんな俺の前で跪いていた。

これが俺の願望……？

そんなバカな。

「今日はもうお疲れでしょうから、お休みください。詳細は明日お話しいたします」

「明日……」

どうやら夢はここまでのようだ。すぐに身体がフラフラする。

もう少し長く見たかったのだが、目が覚めるのではない。

「向こうの世界でもご無事で……」

何か女性 が 呟いていたが、俺は聞きとれなかった。

だが俺、月影^{つきかげ}幻夜^{げんや}にとっては結局、夢は夢だったという訳だ。

しかし、この瞬間、確かに魔王は誕生した。

Hero Phase

目が覚めると、まず目に飛び込んできたのは青い空であった。あまりにも青すぎて、吸い込まれそうになる。絶好のサッカー日和であることには間違いない。

とりあえず、俺は深呼吸をして立ち上がる。

その際、身体の中に入った空気は妙に澄んでいて、違和感を感じる。周りを見ると、森やら草原やらで、人工的なものが何一つ見当たらない。

そんな状態だからか、空気は澄み過ぎているのかもしれない。というか、俺が浮いている。

何か、自然の中に俺がいるということが似合わない過ぎている。

親友たちや彼女が見たら爆笑する光景に違いない。

俺は溜息を吐きながら、草原を歩いていく。

聞こえる音は、工事現場の音や、車の音でも無く、鳥の鳴き声や、風で木々が揺れる音だった。

こんな夢を見るとは、俺は自然を愛する者であったのか。今度みんなに自慢してみよう。

そんなくだらないことを考えて、ゆっくり歩いていたときに、事件が起きた。

「キヤー！」

「!!!」

「誰かー!!!」

俺は声が聞こえた方向を見る。

どうやら、森の方らしい。声からすると、女の子である。

こんな平和そうな場所で、一体何が起きているのか。
俺は走って森の中に入る。

そこで、俺は少女が耳の長い男二人組に詰め寄られているのを見た。
「教えてもらおうか。勇者はどこにいるんだ？」

「そんなこと、知りません！」

「惚けるなよ！！ 貴様が勇者を導く巫女だということを、ラミア様はもうすでにお調べになっているのだ！！」

どうやら良い雰囲気ではない。さらにいえば、この状況を見る限り、悪いのは変な男たちの方だ。

そう考えて動くのが普通なのだが、俺は普通じゃない。

考える前に動いてしまうのが、俺という人間なのだ。

「何をしている！！」

俺は大声を上げて男二人の目の前に躍り出た。

「あん？」

「何だお前」

男たちは俺を訝しげな眼で見る。

「何かと思えば、何の武器も持っていない人族の男じゃねえか」

「弱い奴が何をいきがっているんだ？」

「は？」

男二人はよく分からない単語を言っているようだが、俺にとってはそんな御託はどうでもいい。

とりあえず少女を庇うように立ち、少女に耳打ちする。

「今のうちに逃げる」

「で、ですが……」

「いいから！」

俺は少女を追いやった。

「待ちやがれ！！」

「おっと。お前らの相手は俺だ」

「正気かお前」

「人族が魔族に勝てると思っているのか？」

だから何訳わからんこと言ってるんだ。

俺にはそんな難しいこと分らないっての。

「試してみるか？」

だが、喧嘩は強い方だ。俺にはそんな自信はあった。

「しょうがねえな。相手してやるよ」

「短い命だつたな!!」

男たちは腰にある短刀を抜き、俺に斬りかかってくる。

だが、その打突はあまりにもお粗末であつた。これでは、一はじの方がよっぽどいい腕をしている。

俺はそんな斬撃をひらりとかわし、一人目の顔面に拳を入れる。

「グウツ!!」

「オイ、大丈夫か!!」

「平気だ。チツ油断しちまった……次はそうはいかねえ!!」

男二人は躍起になつて掛かつてくる。

だが、敏捷性やスタミナには自信がある。

徐々に向こうは体力が無くなっていくようだ。

「あの人……強い……」

逃げた筈の少女も、ジッとこの光景を見つめている。が、当然俺は逃げさせたものだと思っている。

そうして、息が切れかけた二人組の顔面に回し蹴りを食らわした。

「ぐはっ!!」

「ぐおお!!」

似たような雄たけびを上げ、二人は尻もちを突く。

「ほらよ。これにこりたら、二度と女の子襲うんじゃねーぞ」

俺は二人組から短刀を取り上げた。

見た目に反して、意外と重いのが印象的であつた。

「くっ……魔法部隊「ファイル」をなめんなよ!!」

一人が突然手を俺に翳し、何かを唱え始めた。

「ん？」

俺は嫌な予感がして、切磋に身構えた。

その瞬間、男の手から火の玉が発射された。

「何いつ!？」

俺は余りにも突発的な出来事に驚くも、持ち前の反射神経で回避する。

避けた火の玉は、後ろの木に当たり、木を燃やし始めた。自然破壊である。

「オイオイ……ファンタジーの世界かよ」

「一般人ごときに魔法を使うことになるとはな……」

「だがこれで終わりだ」

男二人は、この魔法とやらが得意だったらしく、今までの前座みたいなものだった。

武器もともに無い俺は、近づいて攻撃するしか手段が無い。だが、二人組は俺を絶対に近づけさせなかった。

「ハッハッハ！ 今度は貴様の体力が無くなる番だ！」

スタミナには自信があるとは言っても、無限ではないので、いつまでも保つはずが無い。

頭の悪い俺でも、それは理解できた。

「まあせいぜいあがだけあがいて死ぬんだな！」

死ぬとか……大げさだなとか思いつつも、勝負事には負けられない。どんなに劣勢な状況でも俺は頑張ってきた。だから今回も……

「もう止めてください!!」

「!？」

そのとき、逃がしたはずの少女がこの場に戻ってきた。

「な、何で!!」

「私のことはもういいんです……。無関係なあなたを巻き込んでしまい、申し訳ありません」

「ほほう……しゃべる決意はついたのか」

「はい。でも、本当に知らないんです」

少女は申し訳なさそうな顔で二人組の男たちを見る。

「そんな嘘が通るとでも思っているのか!？」

「でも本当に……」

「うるせー!!」

男が少女を殴った。

「きゃっ!!」

そのとき、少女の身体から一本の剣がこぼれた。

「あ!!」

少女の顔に明らかな焦りが見えた。

だが俺は、女を殴った男たちに憤慨し、掴みかかる。

「何だこれは？」

「そ、それは!!」

その間にもう一人の男は一本の剣を拾い、じつくりと観察する。

「これはまさか勇者の剣じゃねーのか？」

勇者の剣？

俺は男の胸ぐらをつかみながら聞き慣れない単語を聞く。

いや、ゲームとかではよく聞く単語かもしれない。

「何だこれ。抜けねーぞ」

だが、男は鞘から抜けない剣に対してイライラしたのか、その剣を投げ捨てる。

「ちっ。なまくらか」

俺はそれを拾う。抜こうとしてみるが、確かに抜けない。

「とりあえずお前は我々と共に来てもらうぞ」

「……はい」

少女は男たちに連れて行かれそうになる。

「待て!!」

俺は抜けない剣を突き付け、男たちを睨みつける。

「その子を離せ。そして、殴ったことを謝れ!!」

「あん？」

俺は少女の前に立ち、男二人の前に立ちふさがる。

「けっ。この女に銘じてお前の命は助けてやってもよかったんだがな」

「無駄死になるぜ」

男たちは、魔法を撃つポーズをとる。
俺もそれを見て剣を構えた。

「燃えろ！！」

男たちの手から無数の火の弾が発射された。

俺は剣で一つ一つを叩き落とした。

「ちっ……剣としてはなまぐらの癖に、盾としてなら使えたのか！」
男たちは懲りずに魔法を放つ。

だが俺は、余裕でその全てを叩き落とす。

だが、敵は二度も同じ手は食わなかった。

俺が魔法を叩き落としている隙に、俺に接近してきたのだ。

「しまった！」

「これでも食らえ！」

男は、密かに忍ばせていたもう一本の短刀を俺の胸に突き刺した。

「！！！」

余りの痛みに声すら出なかった。

夢のはずなのに、妙に痛みはリアルであった。

「くつくつく……素人が」

俺は剣を地面に刺し、何とか立ち状態を維持した。

「もういいですから！！」

少女は傷ついた俺を止めていた。

「もう止めてください！ 私のことば……もう……」

「じゃあ何で悲しそうな顔してるんだよ」

俺は口から血を吐きながらも、少女に語る。

「俺はバカだからよ。先のことなんて考えてねーんだ。いつも今、
自分がどうしたらいいかだけを考えてる」

少女は泣きそうな顔になる。

本当は冗談抜きで痛い。このままその場で横になりたい。でも、女
の子の前ではカッコつけたくなる年頃なのだ。

「泣くんじゃねーよ。俺はな、一度決めたら最後までやりぬく男な

んだよ！！」

そう言つて俺が剣を土から抜くと、何故か鞘は土に刺さつたままであつた。

つまり、剣がさやから抜けたのだ。

「な……に……？」

男二人組はその光景に驚愕する。

「剣が抜けた……！！！」

少女も驚きの表情をする。だが、俺はそんなことなどどうでも良かった。

「てめえらを意地でも謝らせてやる！！！」

俺は剣を構え、男二人組に喧嘩を売つた。

一度決めたこと、それを最後までやりぬくのが俺、あかつきろし暁陽志の信条だ。だから絶対にこの少女を助けて見せる！

こうして、ひっそりと勇者も覚醒したのであつた。

そして、世界は動き始める。

< 続く >

第0話 魔王と勇者（後書き）

異世界ファンタジーは前々から書いてみたいと思っていました。
それと、友情系。

第1話 幻夜と陽志（前書き）

結構時間かかるようで、大変です。

第1話 幻夜と陽志

L o r d P h a s e

目が覚めると、ほぼいつもの朝だった。昨日と同じ朝の風景。ただ一つだけ相違がある。身体が妙に重いことであった。

そういえばさつきまで妙な夢を見ていた気がする。

いや、うつすら覚えてはいる。

だが、夢見が悪いのか、頭が痛く、あまり綺麗に思いだせない。

俺は低血圧と頭痛に悩まされながらも、何とかベッドから起き上がり朝の支度をする。

この家に住んでいるのは、俺の他に妹の静夜しずやだけ。父親は小さい頃に行方不明になり、母親は仕事が忙しく、家に帰れないだけだ。

だから家のことは基本的に俺が全部やっている。

妹はどうしているのかと聞かれると少し困る。

余り兄妹仲がよろしくないのだ。

俺は朝食の準備に取り掛かり、テレビを点け天気予報も確認。妹がリビングに来ると、朝食の皿をテーブルに置く。

「おはよう」

「……」

俺が挨拶しても、妹はチラリと見るだけで何も言わない。

最近折れそうだが、頑張っ続けてる。

「今日」

だが、妹は珍しく俺に口を開いた。

「夕飯は外で食べる。ついでに家にも帰らないから」

だが、大抵はこういうことを口にする。

そんなに俺と一緒に嫌なのか、妹は家に帰らない日も多い。

母親が家に帰っていたときはこんなことなど無かったのだが、思春期は難しい……一応自分もか。

「分かった。気をつけるよ」

俺は精一杯の気を使ってみる。少し失礼な気もするが。

「……ふん」

だが、何か妹は気に食わないようで、俺から顔を背けてトーストを少し頬張る。

そうして朝食を全て食べないうちに黙って家を出る。

「気をつけるよ」

俺が声を掛けても無視。

まあすでに日常茶飯事である。

まあこの程度で腹は立てない俺は、マイペースに自分も支度をする。勘違いしないでもらいたいのだが、俺は妹のことをどうでもいいと思ったことは無い。父親がいなくなり、母親が家に帰ってこない今の状況で、妹の面倒をみるのは自分だと思っている。

だが、妹も年頃だ。あまり抑圧して良いものか迷っている。自立にもちようどいいというのもあるが、俺自身が接し方に困っている方が大きいと思う。

とにかく、今の状況は良くは無い分、ちょっとしたこと状況がソーのように傾いてしまうかもしれない。

それは時と場合によるが、樂觀視できるものではないだろう。

そんなことを考えながら俺は、誰もいない家を後にする。

遅刻はしたくない主義なので、いつも家を早めに出て駅に向かう。

悲しいことに、俺の最寄駅から乗る人で友達は一人もいない。駅までは一人である。

そうして孤独の時間を電車で過ごして数分、やっと俺にも明るい時間が回ってくる。

「おはよ、幻夜」

「よう幻夜」

「ふあゝあ。おあおー」

俺に最初に挨拶してきたのは、潺^{なみ}みなもという同級生の少女。サッカー部のマネージャーで、いつも明るい。

二番目に挨拶してきたのは、おちあいやつすけ落合雄介といって、俺の幼馴染。残念だが男。下ネタが好きな奴である。

最後に眠そうに挨拶してきたのは、あかつきとし暁陽志と言い、俺の一番の親友。みなもの彼氏であり、雄介と俺とこいつはかなり古い付き合いである。

「おはよーさん。また眠そうな面してんな陽志。遅くまで何やってたんだ？」

「カンフー」

「マジで何してんだよ!？」

ちなみにツツコミは俺が強要されている。

証拠VTRをこれから見せるので、俺がいない会話をお楽しみください。

「ちなみに俺はアダルトサイト回ってたぜ」

雄介が会話に加わった。

「良いサイトあった？」

何故かみなもが食いつく。

「まあ20件ぐらいあってな、余りにも多いから全部ブックマした後、一人で頑張ってた」

「ふーん。暇なのね」

「暇というか、こいつはただのバカだと思っぞ」

「バカとか言ったら、お前なんてこの間、ふんいき雰囲気ふんいきをふんいき雰囲気とか言ってただろ」

「え、違うの？」

「大丈夫よ、陽志は私が一生一生、ついでに百生ぐらい面倒見てあげるから」

「それは助かるな」

「俺も彼女が欲しいなあ!!」

「……」

とまあ随分とカオスな会話が繰り広げられていた。そうして、図ったように3人が俺を見る。

「……で、ツツコミは?」「」

「待ってたのかよ!」

こいつらは本当にアホ共だ……俺がいなかったらどうしようもないことは歪みない。

「アンタがつつこまなければ誰がツツコミ入れるのよ!？」

「努力はしような」

「またまた!。ツツコミ好きなくせに」

雄介がニヤニヤしながら俺に迫ってくる。

「キモイから近づくなっ!」

「男は突っ込む生き物なんだから、ツツコミ好きに決まってるだろ!」

「何を力説してやがる!! ここは電車の中だぞ!? 自重しろよな!」

ああ、周りの人間が俺達を奇異の目で見ている……。

俺は今、とても恥ずかしい思いをしています。羞恥心が俺の自我に警笛を鳴らしている。

「次はー夢見。夢見ー」

そんなとき、車掌のアナウンスが聞こえた。いや、この電車はワンマン車両だから、車掌はいないか。

「やっと着いたな……」

俺は溜息を吐く。正直、かなりの疲労を感じている。

「やっとつて…… たった40行じゃないの」

「みなも、お前は空気読んでくれ」

「だつてこれ小s……」

「空・気・読・め」

「OKOK。だからあまり鼻息荒くしないで」

「してねーよ!!」

俺達4人は夢見駅で降車し、徒歩5分の距離にある夢見学園へと向かう。

ここで少し、夢見駅や夢見学園（夢見高等学校）について説明しよ

う。

夢見駅は、あまり大きな駅ではないのだが、駅構内にはファーストフード店とコンビニが入っている。

駅周辺には遊び場といえる遊び場はあまりない。ゲーセンが一軒あるだけだ。しかも校則で立ち入り禁止されているので、あまり意味は無い。

なので、遊ぶ時はここよりもっと先にある夢見東に行くことが多い。うちの高校の校則はそこまで厳しくはない。ただ、進学校であるため、進級が大変である。

本当に自慢ではないが、陽志は何度もピンチに陥っている。本当に自慢できないが。

じゃあ何故陽志がこの学校に通っているのかって？ それは簡単、スポーツ推薦です。よくある話で申し訳ないです。

もう少し捻ってもいいけど、事実を捻っても何の得もない。

とまあ、うちの学園の説明はこれでおしまい。そんなことをしている間に教室に到着したのもあるが。

「相変わらずお前たちは仲が良いな」

俺達に初っ端から話しかけてきた男は、橘一たちばなと言って、クラス委員長であり、剣道部主将の男である。

非常に厳格で、友達と遊びに行くことなどほとんどないだろう。だが、クラス委員としては頼りになる男だ。

「仲がいいんじゃないくて、腐れ縁なだけだ」

俺はいつもと同じセリフを橘に返す。

「またまた、恥ずかしがっちゃって」

みなもが俺をからかう。

「あーもーつつこむ気力ねーよ」

朝から疲れていたので、そんな気力は無い。

ちなみに、妹もこの学校である。

みなさんお解りの通り、妹と学校で話したことは無い。

「月影君！ ネクタイ曲がつてるじゃないの！」

「え？」

次に声を掛けてきたのは、望月^{もちづき}ヒカルというもう一人のクラス委員である。

細かいことに口うるさい女の子で、多少大雑把な俺によく絡んでくる。

「あー。今日疲れてたからなー」

言外にこいつら（陽志ら3人）のせいもあるよ、という意図も込めておく。

だが、バカな陽志はおるか、みんな気が付いてくれなかったので、少し悲しかった。

「こんなだらしのない格好で外を歩いて恥ずかしくないの!？」

「あー、誰も俺なんか注目しないって」

「そんなことはないと思うわ」

「その自信はどこから？」

ときどき彼女、望月さんの言っていることが分からなくなる。

ただ、俺をこうして注意してくれる人材は珍しいと思うし、俺も嫌いじゃない。

だから何だかんだ言いつつも彼女に従う。ま、従わなかったらうるさそうというのもあるんだけど。

「はいよ、これでいい？」

「駄目です!! 私が直します!」

言い忘れていたが、彼女は潔癖症で、扱いが面倒くさいことで有名ならしい。

俺にとつてはそれほど重要な要素ではないので、あまり気にしていない。

「お熱いよお二人さーん」

雄介が俺達をからかう。

「あまり僻むなよ」

「何! バレただと……!？」

「普通分かるだろ! 何年の付き合いだと思ってんだ」

「お、俺はそっちの趣味はねーぞ」

「そっちの意味じゃねーし、俺もねーよ！！ 意味分かんねーことばかり言ってるじゃねーよ！」

「いや、私は男同士の恋愛もありだと思う！」

みなもがまたもや会話に割り込んでくる。

「何お前は力説してんだ！ こんなときだけ反応しやがって」

「幻夜、俺はお前がどんな奴でも親友だと思ってる」

「陽志てめー、後で覚えてろよ」

「悪い、バカだから多分無理」

「そーだった~~~~~！！」

俺は頭を抱える。こいつは3秒で忘れる男だと俺は思っている。

いや、思っているというか真実だと信じている。

「で、もうすぐチャイム鳴ると思うんだが」

俺は冷静になつて時計を指差す。

「というかすでに鳴っている。席に付いておけ」

クラス委員の一人が俺達に注意を促す。

遅刻しそうなぎりぎりな時間帯に登校した訳ではないのだが、友人たちのくだらない会話によって、時間をあつという間に浪費してしまった。

クラスみんなも、一の言うとおりに席に着き始めていた。

非常に優秀で、統率力のある委員長だ。

望月さんも悪くは無いのだが、一が優秀すぎてインパクトが薄い。

良い子だとは思うのだが。

そんな折、教師が俺のクラスへと入って来た。

一の号令で起立や礼などを行い、そのまま着席。たいして興味もないHRでの連絡事項が終了する。

しかしその時、俺はあまり寝覚めが良くなかったためか、眠気が急襲した。

「……ZZZ」

俺は寝た。

「……」

俺はいつの間にか広間にいた。

いや、何故か玉座に座っていた。

これはアレだ。昨日の夢の続きとやらではなかるうか？

「おや、お目覚めですか？ 魔王様？」

「えっと……」

隣から声がしたので、その方を向いてみる。そこには、昨日出てきた三十路の女性……名前はラミアという人がいた。

「あまり気分がすぐれないようですね。もう少しお休みすることをお勧めしますわ」

「はい？」

すると、彼女は俺の額に指を当て、何かを唱えた。

その詠唱は妙に心地よく、俺を眠りへと誘うには十分なものであった。

「おやすみなさいませ、魔王様」

俺の意識はここで途切れた……のだが。

……くん。

途切れたのだが、何やら今度は別の声が聞こえる。
あまり気乗りしないが、目を開けてみる。

しかし、目の前は真っ暗だった。

あ、そういえば机にうつ伏せだった。

俺はとりあえず起き上がって目の前を見る。

「……え」

目の前には意外な人物がいた。

「そこ、私の席」

「はい？」

彼女、羽生巡^{はにうめぐる}は俺に冷たく言い放った。

一瞬彼女の言っていることが分からなくなり、俺が首をかしげる。

「席替えしたんだよ。お前はその左」

「マジで!？」

抜き打ちで席替えを実行する教師なんて聞いたことが無いし、金輪際無いだろう。

それもこれも、寝ていた俺が悪いことは明らかではあるが、都合の悪いことには目を瞑る俺の心理の理解を求む。

俺は彼女が俺に話しかけたことを意外に思いつつも、席から離れ、大した距離も離れていない左隣の席に座った。

俺が席を離れても、彼女はいつものように無表情で本を読み始めた。ちなみに、もうすぐ授業なのであるが。

それにしても、羽生巡……俺は彼女が人と話しているところを滅多に見たことが無い。

人間嫌いなわけではないと思うが、孤独が好きな人なのかもしれないと思っている。

まあ、彼女と話すことなんてこの先無いだろうし、関係は無いと思う。

そうして、いつもの日常がまた始まった。

このまま俺は受験勉強し、大学受験をして、大学行って、普通に就職し、普通に結婚、老後も普通にとか、そういうことを思っていた。だからまさか、もうひとつの世界があることなんて見当もつかなかった。

Hero Phase

俺がまず連れて行かれたのは、とある神社であつた。

「こちらです、勇者様」

「いやだから……勇者って何さ」

俺は、彼女……いすみすみ泉真澄と名乗る女の子を変な二人組から助けた後、何故か勇者様と呼ばれ、ここに連れて来られた。

よく分からない展開に置いていかれそうになるも、俺の頭は「まだ」パンクはしなかった。

ま、いずれするんだろうな。

「勇者様は勇者様です。この泉家の家宝、退魔の剣を抜くことが出来るのは、勇者様だけなんですから」

「えーと。えーと……つまり、俺が勇者？」

「はい」

彼女は、メチャクチャ嬉しそうに笑った。

俺は、かなり引きつつて笑った。

「でも俺、何にも知らないんだよ、ここどこさ？」

俺は身振り手振りで、海外映画のような素振りをしながら質問する。

「ここは泉神社。エスタディアの最東端にある、カント村の端っこです」

「……エスタディア？」

意味が分からない単語を俺は訊き返す。正確に言えば、サイトウタ
ンもよく分からない。

「この世界のことです。あなたはおそらく別の世界から来た人族の
方ですよ。」

「あ、ああ多分」

俺は適当に答えた。よく分からなかったのだ。

そこで俺は異世界という単語が気になった。

「異世界って……所謂パラレルワールドって奴か！？ まさか俺そ
んな展開に巻き込まれちゃったのか！？」

「まあ良く分かりませんが、そうなるんじゃないですか？」

「マジかよ！？ まさか家に帰れないとか！？」

俺は口調に焦りを含んで質問した。

「そういうことは無いと思いますけど。あなたは这个世界では希薄
な存在なので、すぐに戻れると思います」

「そ、そうか……」

この後、この世界についていろいろ学んだ。

バカな割に、こういうことだけはきちんと覚えられる俺の頭。

この世界はエスタディアといい、大きく分けて二つの種族がいるら
しく、それが人族と魔族である。

この二つはいがみ合っており、小競り合いなどが絶えない。

先ほどの二人組は、暗殺部隊の奴らしい。しかし、かなり低級の
ものだったらしい。

普通こういうときには強い奴を送る方がいいと思うのだが、その
ところは良く分からない。バカだし。

そうして、俺は何なのかというと、勇者……世界を救う戦士らしい。
どうやら、魔王が復活したらしく、人族の根滅を企んでいるらしい。
だから、魔王を倒して世界を救え、というまあベタな展開である。
だが、一つだけ分かったことがある。

異世界に俺が召喚されてしまったのは、夢じゃない。

俺の頭がこんな複雑な夢を見るとは思えないし、それに何故か、俺の勘がそう告げている。

だから俺は戸惑いつつも、受け入れた。この状況を。そして決めた。世界を救う旅をすることを。

魔王は倒さないといけないという、俺の単純な頭脳が導き出した答えではあるが、これが俺、暁陽志の意志だ。

しかし、俺の意志が甘いと知るまで、そう時間は掛からないのであった。

第1話 幻夜と陽志（後書き）

ここには何か設定などを書いていこうかと……

第2話 巡とメグ（前書き）

自分の本職はコメディだと思っています。

あとがきに登場人物おさらいを載せています。

第2話 巡とメグ

L o r d P h a s e

気が付くとまた、俺は城の玉座の上で座っていた。

だから何で俺に支配者願望があるんだっつーの。

俺は前々から決めていたことがある。普通に生きる。それだけ。

普通に就職して、普通に結婚して、普通に老後を送って、普通に死ぬ。

「普通」なんて素晴らしい響き。普通が人間が一番いいと思う訳ですよ。

そんな俺に支配欲なんかは持ち合わせてはいないし、ましてや魔王とか……「（笑）」つけちゃってもいいくらいだ。

「魔王様」

そんなとき、俺を呼ぶ声がした。

知っている声なので、ラミアさんだろう。

「えーと……何ですか？」

「魔王様！ あなたは魔王なんですよ？ 下々の私に敬語なんておやめ下さい！」

「あ、ああ……」

そっぴやそんな設定だった。さっき思い出していたのに忘れるとは、俺は鳥頭か。

いや、陽志みたいには断じてなりたくない。

俺はコホンと咳払いをして、ラミアさんに向き直る。

「えーとラミアさん」

「さんも禁止です」

「えーあーラミア……」

「はい」

「……」

何か微妙にからかわれていないか？ 俺。

何故か少し小悪魔っぽい雰囲気があるのだが。

ラミアの笑顔は最低でも無邪気ではない。さすがは魔族。

「魔王様、今日は少し落ち着いてきたようですので、少し部下の紹介を致しましょう」

「それもそうだな……」

俺は、切り替わりが異常に早かったラミアの意見に頷いた。

魔王を演じるなら、部下のことは知っておくべきだろう。

「ではワシが紹介しよう」

「あ、あなたは？」

突然俺の前に入って来た老練な男性。

左目の傷、真つ白な髭と髪、大柄な体格、そして威厳のある声が特徴的であった。

「ワシは、魔王軍総司令官、アブリール・アルベルディという者じや。魔王様、まずはご即位おめでとうございます」

「お、おう……それで、紹介というのは……」

俺は完全に気圧されていた。

この人本当に人間か？ いや、魔族ならば人間ではないに決まっている。

「我が軍は、大きく分けて8つの部隊がある。重歩兵部隊「ヘヴィ」、騎兵部隊「チャージ」、弓兵部隊「ストーム」、空兵部隊「ウィンド」、工作部隊「トリック」、魔法部隊「フィール」、特務部隊「シャドウ」、そして護衛部隊「ガード」じゃ」

意外と多く、しかも覚えにくい。

後でまた聞いてメモをした方がよさそうだな。

とりあえず俺はそこで頷いて、話を進めるように促した。

「それぞれの部隊には部隊長がおつての、例えばラミアは魔法部隊「フィール」の部隊長じゃ」

「なるほど」

俺はラミアをちらつと確認し、頷いた。

「前の4つの部隊……ヘヴィ、チャージ、ストーム、ウィンドの部隊長はそれぞれ自分の領地に散っており、シャドウの部隊長も任務でまだ帰ってきていないため不在じゃ。そこで挨拶出来るのは……」
「ここからは私が」

その時、入口付近に佇んでいた存在感が薄そうな青年……俺と同年か、その上ぐらいの男性が前に出た。

「私の名前はセシル・クロステイ。護衛部隊「ガード」の部隊長です。気安くセシルと御呼びください」

セシル・クロステイは礼儀正しく挨拶をした。

近頃の若者も見習ってもらいたいものである。

「これからは私の部隊が魔王様を御守り致します故、よろしく願います」

「あ、ああ……」

何か俺、凄く調子がくるってしまうのだが……

「何だ何だその堅苦しい挨拶はー？ セシル、お前猫かぶってんじやねーよ」

突然、入口から軽そうな声が漏れ、その音源……声源が姿を現した。

「く、曲者だ！ 魔王様、あいつは曲者です！」

セシルが俺にそんなことを言う。

「て、てつめえ！！ このかつこいい僕はまだ自己紹介してねー

んだよ！！ 本当に処刑されたらどうしてくれる！？ いくら僕様

がイケメン過ぎるからって……」

「魔王様、こいつはリカルドです」

「そういうわけじゃ。自己紹介は終了じゃ」

セシルとアブリール司令官はそう言って自己紹介の時間を終わらせようとした。

「ちよつと待って！！ 僕様の自己紹介短すぎじゃね！？」

「見苦しいですよお兄様」

「あいたっ……」

リカルドの後頭部に、10tと書いてあるハンマーが振り下ろされ

た。

そのハンマーを持っているのは、俺と同年ぐらいの女性だった。

「私はガードの副隊長のメリクリス・モルフィールと申します。このアホそうな男は、一応トリックの隊長です。不幸なことに、私の兄です」

「メリィ」。僕はお前がいて幸せだよ。いたあつー！」

そしてまた10tハンマーを振り下ろされるリカルド。

この男、おそらくシスコンだろう。

「……魔王様、こんな愉快な部下共ですいませんが、これからよろしく願います」

ラミアが呆れた顔でそう言った。

しかし、俺としては、堅苦しいのが苦手なので、ちょうどいいといえはちょうどいい。

「ラミア様」

そのとき、ラミアに誰かが話しかけた。

その女性を見たとき、俺は言葉を失った。

そして、呟いた。

「は、羽生さん……？」

H e r o P h a s e

城下町はとてもよく賑わっていた。

こういう雰囲気、俺はとても好きである。

アルバレス王国城下町に俺は来ている。

泉真澄と共に。

「やっぱり城下町は賑やかですね」

「そーだな」

俺と彼女は、神社から5キロほど歩いてここまでやって来た。

神社の周りには森しかなかったので心配だったのだが、森を抜けるとこんな賑やかな街に出るとは夢にも思わなかった。

「それで、えーと……何するんだっけか？」

「退魔の剣を使えることの報告ですね、まずは王様に会いに行きましよう」

どうやら謁見とやらを済まさなければいけないらしい。

謁見……知らない単語が出るとやっぱり夢じゃないと実感できるな。さすがバカだぜ、あはは……でも悲しいぜ……

そんなとき、酒場から怒鳴り声が聞こえてきた。

穏やかではない感じた。

「……」

俺は迷わず酒場へと向かっていった。

「ちょ、ちよつとアカツキさん!!」

真澄が俺を呼ぶが、俺は構わず酒場へと足を踏み入れた。

最初に見た光景は、人相の悪い男が、少女を睨みつけながら怒鳴っていた。

顔が赤いから、酒を飲んでいるのかもしれない。

少女は怯えて小さくなっていた。

「俺の服を汚しやがって……どう落とし前つけるんじゃないやああん？」

男は酔っ払っているせいか、興奮して、舌が回っていない。

俺はまずいと思って一歩足を踏み出す。

「何とか言ったらどうなんだよ!!」

そのとき、酔っ払いの男が拳を振り上げる。

本格的に危機を察知した俺は、走って二人の間に割り込もうとする。だが、そんな俺を横から抜き去った男がいた。

「そこまでだ」

その男は、俺よりも早く二人の間に割って入り、男の拳を片手で抑

えていた。

「何だてめえは!？」

「相当酔っているようだな。この紋章が見えないとは」

「!？」

謎の男が腕章を酔っ払いたちに見せた時、彼とその仲間たちの顔色が青くなる。

今気が付いたが、彼は甲冑をその身に纏っていた。

そんな重装備で俺より足が速いなんて、正直考えたくない。完璧に敗北だ。

だが、俺の頭はそんなことにまで回らなかったので、単純にホツとしていただけであった。

「アルバレス王国騎士団……しかもベルフォート隊!！」

聞き慣れない単語は無視することにする。

酔っ払いたちは酔いが一気に冷め、急いで片付けの準備をして退出しようとした。

「待て」

「ひっ!」

騎士団の男が酔っ払い……いや、すでに酔いは覚めているのでチンピラたちに名称を変更させよう。

そのチンピラ達を騎士団の男が呼びとめた。

当然、チンピラ達は怯えて身体が動かなくなる。

「お金を払うのは常識だろう?」

騎士団の男がそんなことを言った時、チンピラどもは、ありったけの札束を投げ捨て、逃げ去った。

「……ふう」

騎士団の男は、札束を全て拾い上げ、冷や汗をかきまくっている酒場のマスターに渡す。

「足りるか?」

「じゅ、充分ですね……」

「そうか。ま、迷惑かけたし、ある程度の上乗せは仕方ないという

ことだな」

俺と真澄はその光景を見て安心し、酒場から出ようとする。

「おっと。その君、ちょっと待ってくれないか？」

そんなとき、俺達のどちらかを呼びとめる騎士団の男。

俺と真澄は同時に振り返る。

「君だよ君。変わった服を着ている君」

どうやら俺のことらしい。

巫女服を着ている真澄も十分変だと思うが、この世界ではそこまで変ではないらしい。

「何だ？」

「君もあの子を助けようとしたよね？」

「ああ……そういやそうだったな」

俺はまるで今思い出したかのように相槌を打つ。
実際に今思い出したんですが。

「正直、騎士団以外でああいう行動を起こす人がいたのには驚いたよ。最近では騎士団でも尻込みしたりするからね」

「そうなのか？」

「そうさ。君にはある種の感動を覚えたよ。どうだい？ 騎士団に入ってみないかい？ あ、隊長に頼んで僕と同じ隊にもらうようにもするさ」

どうやら俺、騎士団の勧誘を受けているようです。

騎士団……とても良い響きではある。

興味もあるし、行ってみたいと思う。

「あ、えーと……アカツキさん、その前に王様のところへ……」

「あ、そうか。俺たち、今から王様のところへ行かなきゃいけないんだった」

「え？ 王様って……うちの王様かい？」

「多分な」

騎士団の男が目丸くする。

「何の用があるんだい？ 込み入ったことかい？」

「それはその……ここじゃ人目が多くてあまり……」
「なるほど……そういう事情ですか」

真澄と騎士団の男は俺と別次元の会話をしているようで、俺にはさっぱりだ。

まあこんなことは良くあるから別に平気なのだが。

「結婚ですか？」

「「へ？」」

「それは王様も祝福して下さるでしょう……！」

騎士団の男は何やら勘違いしているようだ。

真面目な割に天然な男のようだ。

「ち、違います……！」

真澄は大慌てで否定をする。

顔を真っ赤にして否定するあたり、相当困っているようだ。

「まあそういうのじゃねーんだ。とりあえず、歩きながら話そうぜ」

俺達三人は、賑やかな街中を歩きはじめる。

「あ、俺は暁陽志って言うんだ。お前は？」

「これは失礼しました。僕は、クラウス・ベルフォートといいます」

最後に俺達は、互いに自己紹介を済ませた。

「……ベルフォート？」

真澄は何やら首を捻っていた。

ベルフォート……どこかで聞いたような……まあいいか。

L o r d P h a s e

俺と羽生さんはしばしの間見つめ合う。

しかし、羽生さんの目は、学校の時ほど冷たい光は無く、別人のようにも思えた。

「あら、お知り合いですか？ 魔王様？」

「あ、えーと……」

ラミアが俺に問いかけてくる。

「あー何て言うか……」

「彼女は私の部下のメグと言います」

「メグ……」

そういうと、メグと呼ばれた彼女は、礼儀正しく挨拶をした。

「メグです。魔王様、以後お見知りおきを」

「あ、ああ……」

俺は頭の中がグチャグチャになっていた。

何で自分の夢の中に彼女……羽生巡と瓜二つの少女、「メグ」が出てきたのだろうか。

「ではこれより、顔合わせは一応終了ですわね。メグ、伝達事項は後でもかまいませんから、魔王様を私室へと案内させてあげなさい」

「はい、ラミア様」

メグは俺に近づき、頭を下げる。

「魔王様、こちらでございます」

メグは俺の前に立ち、俺を先導する。

今は付いていくしかないのです、黙って言うとおりにした。だが、謎は深まるばかりだ。

第2話 巡とメグ（後書き）

簡単に登場人物おさらい

つきかげ げんや
月影幻夜

男

この物語の主人公。普通の高校生だったのだが、ある日突然、異世界エスタディアの魔王となってしまう。

あかつきろし
暁陽志

男

この物語の主人公。彼も異世界エスタディアに飛ばされ、勇者になれる。幻夜とは同級生で、親友である。

はろいふ (めい) へる
羽生巡

女

幻夜と陽志のクラスメートの女子。本を読むのが趣味で、常に一人でいる謎の少女。

つきかげ しずよ
月影静夜

女

幻夜の妹。幻夜とは同じ学校であるものの、幻夜との仲はあまり良くない。

一応ここまで。

第3話 敗北と逃避（前書き）

話自体は進んでいません。

次からようやく本番だと思われます。

第3話 敗北と逃避

H e r o P h a s e

王城へと向かう最中に、俺と真澄はクラウドに事情をいろいろ説明した。

俺が呼ばれたこと、真澄との出会い、退魔の剣についてのこと……などなど。

このクラウドという青年は何となく信用できそうだ、と思ったからというのもある。

普通ならここまでぺらぺらはしゃべらないとは思っ……自信ないがな。

「曉さん。その話が本当なら、まさか貴方が伝説の勇者と言うことでは!？」

「……そうらしいんだが、実感ないな。それに、俺にはなんの力もないぞ」

実際、魔法を相手にするとどうしようもない。

それに、一と違い、剣術の経験もない。俺、サッカー部だし。

「ですが、退魔の剣を抜くということこそが、証明になっていると思います。まあ僕も勇者の伝説噺については詳しくないんですがね

……」

クラウドが苦笑いする。

「魔王が世界に君臨する其の時、異世界から勇者が舞い降りる……

私の家にある勇者伝の一文です」

今まで黙っていた真澄が口を挟んだ。

「私の家は代々退魔の剣を守っていた一族ですから」

クラウドが不思議そうな顔をしていたので、真澄が説明を付けたす。

「なるほど。あなたが退魔の剣を守護する一族だったんですね……

それは知りませんでした。ですが、よく今まで守護出来ましたね。

魔族にとってその剣は、忌まわしきもののなのでしょう?」

「普段は泉家の封印殿に保管されていますから」

「封印殿?」

聞き慣れない単語に俺は首をかしげる。

残念ながら、俺はそこまで突っ込んだ質問をしていない。

しても難しくて頭に入らないだろうなあと思っただからである。

「はい。所謂宝物庫みたいなものです。普通の宝物殿と違うところは、泉家代々伝わる秘術、「十字封印」が掛けられています。その封印を破ることは、泉家以外は不可能です」

「そうですか。勉強になりますね」

「……」

何だか俺、話に置いていかれてる?

結局説明を理解できていないし。

俺は呆然と二人を見ているだけだった。

「それで、王様に謁見なさる理由は勇者のことですか?」

「はい」

「……」

クラウドは少し考える。

「どうしたんですか?」

難しい顔をするクラウドに真澄が尋ねた。

「それはあまりお勧めできません」

「どうしてですか?」

「暁さんの力を疑っている訳ではないのですが、勇者であることが周りに知られてしまうと、周囲は過度の期待を寄せてしまう。しかし、その過度な期待に貴方が答えられるかどうか……今の不安定な世の中、誰もが救世主を求めていますからね……。とりあえず、僕と戦ってみてください」

「……」

俺は黙ってクラウドの話聞いていた。

細かいことは良く分からなかったが、結局のところ俺は力不足かも

しれないと言いたいのだろう。

一応俺も魔法兵二人を退けることはできている、そこまで力が無いとも思えない。

だが彼は俺と戦え、と言う。それはつまり、彼ごときを倒せない者が、勇者として魔王を倒すのは不可能と言いたいのだろう。

「分かった。どこか空き地はあるか」

「え？え？」

真澄だけあわあわしながらその様子を見守る。

まさかの展開であったことに違いない。

「ええ。騎士団の旧訓練施設に行きましょう」

俺はクラウスに付いていく。当然真澄も。

これが俺の最初の試練になろうとは、思いもしなかった。

L o r d P h a s e

「メグ」と別れて自室で休むことになった俺。

どこからどう見ても、クラスメートの羽生巡にそっくりだ。

俺の夢の中に登場するほどの、重要キャラだったのか？

そんなことはないとは思いつつも、彼女を気にする自分は確実に存在する。

「魔王様」

そんなとき、自室の戸が叩かれ、メグが入室する。

「な、何だ？」

少し動揺したか、声が上ずってしまったようだ。

「お飲物をお持ちいたしました。紅茶でよろしいでしょうか？」

「あ、ああ……悪い」

俺は謎の動悸を感じながら、彼女の手際良い紅茶の淹れ方を見る。普段の彼女とは違う気がする。

彼女の顔には確かに「生」がある。

いつもの彼女は無表情で、「生」というものを感じさせない。だが、今の彼女はどうかだろうか。

「お熱いのでお気をつけてください、魔王様」

俺にお辞儀をし、表情も柔らかく、生き生きとしている。

これは何だ……俺の願望……？

よく……分らない。

「な、なあ……」

だから質問をする。

「お前って俺と同じクラスの羽生巡……だよな？」

「……」

彼女は一瞬だけキョトンとする。

しかし、すぐに真面目な顔をする。

「そうですね。向こうの世界ではそう言う名前ですね。ですが、今の私はメグです。ここでその名を二度と呼ばないでください、魔王様」

「え」

彼女は自分の名前が好きではないのか、少しだけ表情が歪んだ。

だが、それだけではない気がする。

「ここではお前のことをメグって呼ぶのか？」

「そうしていただけると幸いです、魔王様」

俺に向かって恭しく頭を下げ、メグは少しだけ柔らかめの無表情になる。

彼女について若干気になる部分が何箇所があったものの、彼女自身訊かれたくないこともあるだろう。

だから俺はそこで会話を止めた。

その選択が正しいかどうかは分からないが。
彼女の退出後、俺は大げさに装飾されてあるベッドの上に横になる。
あんまり好きな飾りでもなく、センスもいいとはいえないので、変えてもらおうと思ったが、それよりも眠気の方が上手であった。
フカフカベッドのせいかな、すぐに寝つけるだろう……

Hero Phase

天才……それは誰が作った言葉だろうか。

そんな便利な言葉を作った人こそ天才だろう。

天才……言い訳として使いやすい言葉であることには間違いない。
あらゆる経験、努力をも無とし、それを才能だけで越えてしまう……
それはまさしく天才だ。

俺にしては珍しく難しいことを考えている。

だが、分かったことは一つだけだ。

俺は天才じゃない。

目の前で涼しい顔で立つ青年を見上げる俺。

もうすでに何度この光景を見たことか。

俺の身体はすでに泥だらけであり、何度もつかされた尻もちは痛む。
「……」

青年はまだ汗もあまり掻いていないようだ。

対して、汗まみれの俺はまた立ち上がる。

悪いが、諦めが良い方じゃない。いや、確実に悪い方だ。

「クラウド……アンタは正直強い……退魔の剣を抜き、魔法兵二人
ごときを倒したぐらいで天狗になってた俺が恥ずかしいぜ」

俺は地面に刺さっている退魔の剣を抜く。

「僕が強いかどうかは分かりませんが、これが今の暁さんの実力で
す。酒場でのあの行動を見た限り、気持ちは立派です。ですが、そ
れに見合うだけの力がありません」

クラウドは冷静に俺のことを分析する。

確かに、剣術も剣道もよく知らない俺の太刀筋は滅茶苦茶だし、剣
よりも拳で戦う方が慣れている俺は、確実に弱い部類に入るだろう。

「この世界では、弱い者は死んでいく傾向にあります。僕は貴方を
認めていますし、貴方に死んでほしくありません。でも、本当に良
かった……王様に会う前に僕と出会って……」

クラウドは目をつぶって微笑む。

「僕に会っていないければ、魔王討伐に強引に行かされたでしょう
かね……」

クラウドは立ち上がる俺に構えをとる。

「……今は魔王とか勇者とかどうでもいいさ。俺はアンタに勝ちに
行く……」

俺も素人ながら、それなりの構えをする。

経験が無いせいもあるのだが、隙があるとかないとか、全然分
からない。

どのタイミングで切りかかってでもクラウドに反撃されるだろう。

だからって……ここで退く訳にはいかない！

「俺から行くぜ……」

俺は退魔の剣をとにかく振り続ける。

縦横斜め、時に突いたりなど、スタミナの続く限り攻撃し続けた。
とは言っても、ここで俺が真の力を解放して余裕で勝ったりなど、
最強系のありきたりな展開にはならず、俺はそのままズルズルと敗
北を重ねていったのだった……

「……」

この世界で生きることとは、もやしつこではない俺でも難しいらしい。悔しさはある。でも、悲しくはない。

だから俺の中で一番芽生えた感情は、強くなりたいという思いだった。

「クラウド。俺はどうやったら強くなれる？」

「騎士団に入れば……と言いたいんですが、それよりも世界を旅する方がいいかもしれないですね」

クラウドはやや柔らかめな表情で俺に告げる。

「旅……か」

この世界には、おそらく手練のものがたくさんいるだろう。

俺はクラウドの言葉に強く頷いた。

「クラウド。次会った時は必ず勝つ。だから……」

クラウドは俺の言葉を静かに待つ。

「腹減ったからどこか入らないか？」

俺の言葉にクラウドと真澄は盛大にこけたのであった。

L o r d P h a s e

人族と魔族は敵対する種族。

俺は魔族の王である魔王。

最大の敵は、人間から選ばれた勇者。

何かそんな感じの話を長々とメグやセシルから聞かされた。

何だか壮大な夢になって来た。いよいよ俺の頭は末期らしく、頭から浮かんでくる言葉は現実とは無縁のワードのみ。

受験シーズン中は心を病んで鬱になったりする人がいるが、俺もその一部なのか、はたまた真逆なのかは

この場ではつきりさせることはできない。

ただしかし、18年間生きてきた中で最も心がおかしいことは事実なのだろう。

出来ればそんな事実、マスコミのように捻じ曲げて公開したいものだ。

しかし、そんなことは出来る筈もないし、出来ても自分が後悔するかもしれない。

もし俺がマスコミならば、この設定を感動モノの恋愛ドラマとして報道する予定だ。

だがしかし、世間は残酷なもので、面白おかしさが重要な場合もあり、そのときは俺のマスコミ報道の方が棄却され、ファンタジックなこの夢を採択するだろう。当然、曝し者は俺である。

何故こんな不毛なことを考えているのだと思う？

人間、自分の頭の容量を超える情報を与えられると、バグが発生すると思うんだ、俺は。

よくよく俺の考えたことを考えてみれば分かんと思うが、俺の考えていることは一貫していないことがお分かりいただけるだろう。つまり、すでに俺は闇に堕ち、もはやまともに考えることすら出来ないということをお願いしたいのだよ。

ちなみに、もつと簡潔に言えば、眠い。

最初からこのように告げていればこんな長々と語らなくても良かっただろうに。

しかし、それは全て現実逃避。今の俺が完全に癖になってしまっているものだ。

これから朝食を作り、俺を嫌悪している妹と顔を合わせ、学校に行かなければならない。

学校には彼女、羽生巡がいる。

何だか会うのが凄く気まずい。別に彼女は俺と出会っていないのだが、夢の中にロクに話さないクラスメイトの女子が出てきている俺にとっては別だ。

俺は気乗りしないまま、ベッドから起き上がり、死んだ魚のような

目で窓から漏れ出る陽光を見る。
何故だろう、少し家が懐かしく感じるのは。

第3話 敗北と逃避（後書き）

自分の中で、納得できないけれど投稿することがあります。
この話がそれに当たります。

第4話 妹と盗賊（前書き）

題名が意味分からなくなってきましたね。

話の進行が遅くなりそうなので、結構駆け足にすることにしました。

第4話 妹と盗賊

L o r d P h a s e

近頃の若者は電車の中で携帯電話を弄ることが多く、本（漫画、雑誌は除く）を呼んでいる人など稀有である。

そうだと知りつつも、チラチラ周りを見て俺の心の束縛源を探すが、さすがに、そんな運命めいたものなど存在せず、特に変わらぬいつもの朝の光景であった。

若干俺の挙動が不審になっていることは除きます。

「よう」

「おう」

電車に乗ればバカ一人と言うことは良く聞くが、（聞かねえよ）まさか自分の身に起こると思ひもしない。……訳ではないのだが。

「おはよー幻夜！」

「よう減夜。朝から辛気臭そうだな！」

元気だけが取り柄の三人組いつものように挨拶をし、いつものように学校に行った。

何だか自分が馬鹿に見えてきた。

「幻夜。落ち着きないわねー」

「そうか？」

みなもは意外と鋭い人間で、ときどきギクリとさせられる。

だが、一応それは計算の範囲内だったので、ポーカーフェイスは崩さない。

「何かあれよ。可愛い娘さんはおらんかのーゲへへ、みたいな感じ」
「そんなオヤジ臭いこと考えてねーよ！！」

だが、似たようなことを考えているのは事実であり、あながち嘘とは言い切れないのが痛いポイントだ。

「まああれだよ。幻夜も男さ。昨日の夜処理できなかったものが…

…」

「てめえはもう外でしゃべんな」

俺は幼馴染の落合雄介（みなさんは覚えてるだろうか？）の口に超絶激辛ミントタブレットを20個ほど放り込んだ。

「ちょ！ 待って、辛っ！ これメツチャ辛っ！！ ゲホゴホ！！」

「死にはしないって」

「死んでも心配しないって」

「誰！？ 今さり氣に酷いこと言った人！！！」

アンサー、暁陽志。

「相変わらず賑やかだな、お前ら」

「おはよう、月影君たち」

「俺達は付属品だよ……」

陽志が何やらぶつぶつ呟いていた。

「おはよう、一、望月さん」

そんな陽志に気にせず、俺達は二人の学級委員に挨拶をした。

「あれ？ 今日ってまさか模試だったけ？」

ん？

みなものの言葉に、教室にいる連中くわいずめーとを見る。

真剣そうに志望校コード番号表や、参考書、教科書を見ている人間が半分ほどいた。

もう半分はいつも通りだったが。

「そうだぞ。月影はきちんと準備してきただろ？」

一はさも当然そうに俺を見る。

「え？ あ、ああ……いや忘れてた」

『え？』

俺の言葉に、その場にいた5人が固まった。

いつもの俺ならば、きちんと準備をし、前日は特に勉強したりした。

「最近疲れてたからかな」

「どうしてだ？」

陽志が俺を不思議そうな顔で見る。

「お前らもその一因なんだけど」

「陽志、幻夜つてときどき頭おかしいこと言うわよね」

「そーだな」

「お前ら……！」

陽志とみなもはいつものコンビニーションで俺を弄ってくる。

「はぁ……」

俺はやってられないとばかりに、自分の席に着く。

「……」

そこで、隣に、座る、女の子に、気が付いた。

「……」

今日の俺、何で学校行くのに憂鬱だったのか。

それは彼女のせいではないか？

いや、向こうにとつてはいい迷惑かもしれないけど。

俺の頭は瞬時にテンパった。

どうすればいいんだ？

俺は今日何をすればいいんだ？

そうして考えているうちに、まともに問題が解けずに模試が終了した。

「……うわあああああああ！！」

俺は発狂しながら教室を出ていった。

「幻夜つてマジで頭おかしくなったわけ？」

「俺、バカだからわかんね」

陽志とみなもは生温かい目線で俺を見送っていた。

そんなことより、俺はどこへ駆けているのか。

分かんないけど、多分屋上だ。

俺は屋上の扉を開ける。

「俺と付き合ってくれ！」

「……」

それと同時に聞こえてきたのは、男子の叫び声。
内容的には女の子への告白だ。

というか、俺まずい現場にいるんじゃない？

俺は慌てて屋上の扉の陰に隠れた。

だがしかし、告白されている女の子と目が合ってしまった。

「……」

「……」

……俺の妹だった。

何この気まずさ。何この俺の人生。いろいろと最悪じゃないか？

「ごめんなさい」

だが次に聞こえてきたのは、妹の柔らかい声。

こんな妹の声を聞いたのは何年振りだろうとか思いつつ、今の言葉は告白してきた男子に向けられたものだと思い付いた。

俺相手にはもつとドスが利いた声でしか話さないからな……

「り、理由を教えてくださいませんか？」

「まだ貴方のこと良く知りませんし、私は好きな人がいるんですなぬ！？」

それは初耳だ。というか、俺にそんな話などする訳が無いので、初耳に決まっていた。

「そ、そうなのか！？ それ誰なのか聞いても……」

「ダ、ダメよ。まだ誰にも言っていないんだから……」

妹が顔を俯いてもじもじする。

うわあ……何だこれ。気色悪いんだけど……俺の前じゃこんなこと絶対しないからな。

「そ、そうか……じゃ、じゃあメルアド教えてくれるか？」

男子の方は諦めがあまり良くないらしく、どうしても俺の妹と繋がりを持ちたいらしい。

妹はどうするか思案していた。俺は黙ってそれを見る。

「……」

そのとき、俺はドアに右足の小指をぶつけた。

「痛っ！ー！」

俺の声に男子が振り返る。

男子はかなり気まずそうな顔をしていた。

「あれ？ 先客がいたのか……」

俺は白々しく今来たかのように装った。

デバガメだと思われたくないし。

「あ、これ俺のアドレスだから！ 気が向いたらメールしてくれない！！」

男子は胸ポケットから出した紙を妹に強引に渡して、そそくさと屋上を出ていった。

俺の前を通り過ぎる時、かなり気まずそうな顔をしていたのが印象的だった。

そして、屋上で妹と二人になった。

「屋上って今の時間は立ち入り禁止じゃ……」

「デバガメ」

俺の口から最初に漏れ出た事務的な言葉に、冷たい4語で返した。

まさに一刀両断、絶対零度の態度である。

「悪かったって……でも、偶然だったんだ」

「……あげる」

妹は俺にさっきの男から渡された紙を押し付けた。

「おい、これはお前が……」

妹は何も答えずに屋上から降りて行った。

俺は溜息をつきながら、携帯番号とメルアドが書かれている紙を見る。

「……」

そして、大して痛くもない右足の小指をさする。

「……」

余計なことだっただろうか？

Hero Phase

どうやら、俺の存在はこの世界ではキハクらしく、俺が現実世界で1日過ぐすと、向こうでは3日ほど経っていたりする。

なので、俺は3日間ずっと宿屋で寝ていたいらしい。

「このままでは長期の旅はできませんね」

クラウドが俺に告げる。

「もうすぐ慣れると思うんですけど……」

真澄は自信無さげに言う。

そんな真澄の頭に何となくポンと手を置く。

「え……」

真澄は不思議そうに俺を見る。

「悪い。何となくだ。気にするな」

「兄妹みたいですな」

クラウドは俺達二人を見てそんな言葉を漏らす。

「アカツキさんは何歳なんですか？」

「俺か？ 18だけど」

2か月前に18になった。

「あ、やっぱり年上だったんですね。私は15歳です」

「15歳？ その割にはしっかりしてるな」

俺は正直な感想を漏らす。

神社には彼女がいなかったようだし、自立しているように見える。

「暁さん、15はもう成人ですよ」

「え!？」

クラウドの言葉に俺は驚いた。

「俺の世界では20からだから……」

「そうなんですか」

真澄は興味深々に頷いた。

「じゃあお酒とかは20歳にならないとダメなんですか？」

「法律ではそうなる」

「あ、じゃあ隠れて飲んだりとかしてるんですね」

「ま、まあな……」

俺は真澄の鋭い指摘に動揺しながら肯定する。

「ははは……この世界ではそんなこと気にしなくても飲めますから、安心して下さい」

クラウスは苦笑いしながら言った。

この世界では15からお酒が飲めるらしいので、確かに安心だ。

でもそんなにお酒は好きじゃ無く、大抵はジュースかスポドリだ。

「ところでクラウスはいくつなんだ？」

「僕は20ですが」

「ええ！？先輩だったんすか！？」

部活という上下関係が良く働いてきた場所に所属している俺は、急に畏まってしまった。

「いえいえ、そんな畏まらずに。全然タメ口で構わないですよ。敬語使われるの苦手ですから……」

「あ、分かりました……いや、分かった。真澄も俺のことタメ語で構わないぞ」

「私は生来こういう言葉遣いでしたから」

真澄は笑顔でそんなことを言った。

だが、意味の分からない言葉を使っていたので、完全に理解は出来てはいない。

「それで、これからどうするべきなんだ？」

「まずは隣町のタスタに行きましょう。馬車なら5時間かかりませんから」

「あ、それならアカツキさんも安心して旅立てますね」

野宿で3日寝てしまうことほど酷いことは無い。

だから、俺達は意気揚々と馬車に乗って旅立つことにした。

クラウドは騎士らしく、馬の扱いも上手かった。

「まさか馬車をお前が動かすとは……」

「ははは……騎士の端くれですから」

その騎士の端くれに負けた俺の立場は……

今、俺の心にOTLが埋め尽くされていた。

「アカツキさん、お団子と羊羹ありますけど、いりますか？」

何であるのかというツツコミは幻夜担当なのでしなが、疑問に思う。

「買ってきたのか？」

「ええまあ……」

まさかこの子、食いしん坊キャラなのか？

「アカツキさんはお腹空きやすそうですし……」

あ、食いしん坊キャラって俺のことか！

ならそのキャラを通さないと。

「ありがたく頂くよ」

俺は団子と羊羹に手をつける。

その時、馬車が急ブレーキした。

「何が起きた！？」

俺と真澄は前のクラウドを見る。

「盗賊です」

「盗賊！？」

俺は馬車から顔を出し、周りを見る。

すると、明らかに人相の悪い男たちが、短刀を抜いて俺達を囲んでいた。

「お前たち、何者だ」

クラウドが凜とした声で尋ねる。

「盗賊ギルド、「シューティングスター」だ！ 金目の物は置いておきな！」

「僕をアルバレス王国騎士団、ベルフォート隊所属と知っての狼藉

か！」

「ああん？　いくらそうでもこれだけの人数に勝てると思っているのか？」

盗賊の数は30人近かった。

「なるほど……　晁さん、泉さん。自分の身は自分で守れますか？」

「当たり前だぜクラウス。出かけられない間、お前と何回訓練したと思っっているんだ？」

「私も大丈夫です」

真澄は札を三枚取り出した。

「出でよ、鴉、狗、子龍！！」

真澄が投げた三枚の札から動物が三匹出てきた。

彼女にこういう能力があったと知った時、俺は中々驚いた。

俺に最初助けられた時は、札を忘れるといううっかりをしたらしいが……

「俺も負けてられねーな！！」

俺は退魔の剣を鞘から抜いた。

「前は僕に任せてください！」

「おう！！」

俺は鞘を相手にかざし、その鞘と剣を重ねると、剣に光が発した。

「行くぜ！」

俺は自慢の足で相手の中へと突っ込んだ。

盗賊たちは急いで態勢を整えようとするが、一足遅かった。

俺のまだ稚拙な剣技でも十分通用する相手であり、クラウスと散々稽古してきた俺にとっては、かなり楽であった。

真澄も三匹をうまく使っており、自分の身を守りつつ、相手の数も着々と減らしていた。

「このままいくぜ！！」

「くっつ……調子に乗せるな！！」

「何！？」

俺はいつの間にか相手に囲まれていた。

クラウドとの稽古では、常に一対一であり、多数を相手にする稽古などしていなかった。

「ちっ」

「死ね!!」

盗賊たちが俺一人に一斉攻撃をしかけた。だが、そんな俺の前に一つの影が遮った。

「だああああ!!」

その影は、俺の前に立ち、槍を回して周りの盗賊たちを一掃した。

「な、何だこいつ……!!」

「私にかかってくるならそれもいい。命の保証はしないがな!」

これが俺と長らく付き合うことになる、女性槍闘士セシルとの出会いであった。

第4話 妹と盗賊（後書き）

キャラクター紹介？

潺^{せせり}みなも

陽志の彼女であり、陽志の所属するサッカー部のマネージャー。明るく、人気者。

落^{おち}合^{あい}雄^{ゆう}介^{すけ}

幻夜と陽志とは古い付き合い。下ネタが大好きなアホ。憎めない性格なのか？

橘^{たちばな}一^め

剣道部所属で、幻夜のクラスの委員長。風紀にうるさい。後輩から人気がある。

望^{もち}月^{づき}ヒカル

もう一人のクラス委員長。成績優秀な割にふざけてる幻夜によく突っかかるが……。

第5話 距離感（前書き）

超久しぶりの更新です。

もう少しまとまった時間が欲しいところ。

それと、Twitter始めました。

ユーザー名は「c f f | s a k i」です。

第5話 距離感

Hero Phase

盗賊に囲まれた俺のピンチにやって来たのは、女性の槍闘士であった。

「私にかかってくるならそれもいい。命の保証はしないがな！」

随分と男らしい性格のようである。しかし、素人目から見ても彼女の強さが手に取るように分かった。

彼女に掛かっていく盗賊たちは、ものの1、2秒でノックアウトしてしまっている。

そうこうしているうちに、盗賊たちは逃げ失せてしまった。

「逃がしたか……まあいい。あんな小者達は」

「えーと……」

俺は彼女の方へと向く。

「お前達、こいつら……盗賊ギルドと知り合いか？」

しかし、最初に話しかけてきたのは彼女の方だった。

「いや……」

俺は首を横に振る。そもそも、襲われたのは今回が初めてである。

「そうか……」

彼女は見るからに落胆した。何かを俺達に期待していたらしい。

「それよりありがとな」

俺は彼女に面と向かって感謝をした。

「いや、私は私のやることをしただけだ」

女性はクールに返した。戦闘時とは大違いであった。

その時、俺の隣から真澄がひょっこり現れる。

「私も言わせて下さい、ありがとうございました」

真澄は当然俺より丁寧に感謝をした。

「……まあこれからは気をつけることだ」

そう言つて槍使いの女性は立ち去ろうとするのだが、クラウドの聲が彼女を立ち止まらせた。

「セレスじゃないですか。ありがとうございます」
「げ」

女性は見るからに嫌そうな顔をして、クラウドを見る。

どうやら彼に会う前にこの場を立ち去ろうとしていたらしい。

「面倒な奴に会つちまったな……挨拶はもう良いだろ？ 私は帰る」

「まあ待って下さい。久しぶりじゃないですか。それにタスタへと行くのでしょうか？」

「……」

「そこで僕が奢りますよ。今日のお礼です」

「わっ！ ちよっ……！！」

そう言つてクラウドは強引に女性を引つ張つていった。

意外と強引な男らしい……

L o r d P h a s e

「それですね、魔王様。お次は……」

俺の前で恭しく頭を下げながら報告をする女性。確か俺の護衛部隊の副隊長、メリクリス（通称メリィ）だったか。

「そして……が……であり……」

「あの」

「どうしました？」

俺が話しかけると、どこか壁を作つて応答する彼女。

ここまで露骨に隔たりを感じると、いい気分はしない。つまり、あれだ。堅苦しいのだ。

「何で俺に敬語使つてるの？」

「魔王様ですから」

「……」

まあこんな答えが返ってくるって予想はしてたさ！

「いやまあそうなんだけど…えーと君何歳？」

「え！？」

メリクリスは明らかに動揺した。

何故かは分からないが、顔も心なしが赤くなっている。だが、深呼吸をして彼女は少し落ち着いていたようだ。

「じゅ、じゅ、じゅ、じゅ１７です…」

いや、落ち着いていなかった。

「俺と同じ年だな」

「は、は、そ、そうなのでございまするか？」

いや何でこんなに動揺してるんですか？

さつきよりも頬は上気しているし、挙動も不審になっている。

まあ気にせず話を進めることにする。

「俺に敬語使う必要ないから。全然」

「そ、そそそれはやはりわだわった私を…」

すまん、何を言っているか全く分かん。

「魔王様」

そんなとき、俺の護衛部隊の隊長であるセシルが会話に入ってきた。

「どうした？」

「魔王様はご存じではないのかもしれませんが、魔族にとって、年齢を訊くという行為は恋愛的な意味での告白の一種でもあるのです」

「な、なにーーーーー！？」

俺は初めてこの世界で間抜けな声を出してしまった。

ほれ見ろ、数人がクスクス笑ってやがるぞ。まあこの雰囲気の方がなじみ深いかな。

「なので、メリイは今、魔王様からのプロポーズを…」

「うわああああ！ 違うんだ違うんだ！ ただ単に年齢聞いただけなんだ！！」

というか何てややこしい種族なんだよこいつらは……。

「とりあえず詳細はこの報告書にまとめましたので、後でお読みください」

「あ、ああ……」

「それでは我々はこれで」

そう言いつと、セシルとメリクリスは執務室から去っていった。

…今日は少しだけマシな会話が出来たようだ。

夢とはいえ、堅苦しい会話は精神を疲れさせてしまう。もう少し楽に暮らしたいものだ。

「はあ……」

「魔王様」

「うわああああ！」

俺が溜息をついていたら、目の前にメグがいた。

「何回かノックしたのですが、反応が無かったので」

「ああいや…何の用だい？」

「お茶をお持ちしました」

メグはトレイに載せてあるティーカップを俺の机の上に置こうとする。

「きゃっ」

だが、スカートの裾に躓いたのか彼女はバランスを崩す。

「危ない！」

俺は急いで彼女を支える。

ビシャッ

「あつっ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!!!!!!!」

宙に浮いた紅茶が俺に降り注いだ。

パリーン

しかもティーカップは無残に散っていった。

「ああああすいませんすいませんでした！！ 魔王様どうかお許しを！」

メグは俺の前で土下座をした。切腹しかねない勢いで。しかも急いで割れたカップの破片も片付けていた。

「ちよつ！ そんな急いで拾ったら…」

「痛っ…」

案の定指を切ってしまった彼女。まるで回りが見えていない。どうやらメグ≠巡ではないようだ。巡はもつと冷静だし、何か近づきがたいオーラ出てるし。

俺は彼女を落ち着かせ、絆創膏を渡す。

「いやまあ気を付けなよ。というか何でそんな服を着ているんだい？」

今まで詳しく言っていなかったが、彼女が来ている服はメイド服に他ならない。

「ラミア様が…魔王様が喜びになるってこれを…」

…あの人、俺をからかって楽しんでいるな。

「はあ…まあとりあえずこれからは気を付けることだよ」

もう着なくていいよとは敢えて言わなかった。

何かもつたいない気がする。

とりあえず彼女は指を3本ほど負傷しただけだし、俺も頬に軽いやけどを負っただけなのでよしとする。

メグは最後まで俺の罰を恐^{オシオキ}れていたが…

Hero Phase

タスタに到着した俺達は、自己紹介を行った。

やはりセレスとクラウドは顔見知りらしく、昔いろいろあったらしい。

省略して言うと、セレスは傭兵で、クラウドに一度雇われたというわけだ。

「へえ…旅人ねえ…何の目的で？」

セレスは焼き鳥串を頬張りながら尋ねてくる。

「まあ大それたもんじゃないが…強いていうなら強くなることが目的だな！」

「ああなるほど。アンタ弱そうだもんねえ」

セレスは豪快にビールを飲み干しながら答える。

「い、いやまあ弱いけど！　これから強くなるから楽しみにするんだ！」

俺は何の根拠もなく言い放った。

まあよくあることだ。気にしない。

「で、何でクラウドはこいつと一緒にいるの？　理解できないんだけど」

「あ、ああそれはですね…」

クラウドは困ったように笑う。勇者云々については秘密だからかもしれない。

「陽志さん。ちょっとその剣を彼女に見せてあげて下さい」

「え？　まあいいけど」

何を思いついたのか、俺の剣が必要だと言つので俺はセレスに見せてみた。

「こ、これは…！」

「ああセレスさんもお存知でしたか。さすがは「傭兵」なだけあつてくわしいですね」

セレスはその言葉にクラウドを睨みつける。

だがクラウドは意にも返さないようだ。

「ちっ…なるほどな」

セレスはビールを一気飲みをする。

いまさらなんだが、この人よく食べるしよく飲む…

「それでここからが本題なのですが、貴方も一緒に来ませんか？」

「は？」

クラウドはセレスを仲間に誘い始めた。

「陽志さんはどう思いますか？」

「まあそうだな。俺も仲間はいっぱいいた方がいいと思う。真澄は

？」

俺は先ほどから黙りこくっている真澄に話を振る。

「わ、私も賛成です！」

突然話を振られたからか、多少動揺しながら答えていた。

「どうです？ 貴方にも「メリット」はあるんじゃないですか？」

クラウドがセレスに「メリット」を強調して喋る。

「クラウド。私がお前を気に入らないのは、そう知った風に口を聞くところだ。しかも実際調べ上げているんだろ。性格の悪い奴め」

「それは申し訳ありません。でも貴方に興味があるからってことはダメでしょうか？」

「しかも口も回る…タチも悪いな」

だがセレスはクラウドが本当に気に入らないようだ。

「セレス。僕は騎士なんです。いつ緊急招集があるか分からない。

そのとき、陽志さんたちと一緒に戦える人がいなくなったら困るんです」

クラウドは今までで一番真剣な顔で話した。

「だから、お願いします」

そして深々と頭を下げる。

「……」

セレスは思案した。クラウドが彼女にここまで頭を下げることはめったにないからである。

「…いいだろう。だが報酬は貰うぞ」

「当然です。騎士団から出させていただきます」

どうやら契約成立のようで、セレスはクラウドの言うことを承諾した。

「これからよろしくなセレス」

俺はセレスに手を差し出す。

だがセレスは俺の手を取らず、俺の目を見る。

「な、何だ？」

「…いや。まさかお前とは思わなくてな」

「？」

セレスの意味深な言葉に俺は首をかしげた。

「とりあえず、これで私たちは仲間ですね！」

真澄が嬉しそうに手を合わせて喜んだ。

「でさ、俺達つて結局のところ何が目的なんだっけ？」

だが、そんな和やかな雰囲気も、俺の言葉で凍りついた。

何か悪いことでも言ったか？

「陽志さん。何のために貴方はここにいて、この剣を所持しているんです？」

「あー確か魔王がどうか……」

もううる覚えとか、俺の頭は容量が少なすぎる。

「ああその件なんですが、セレスは何か情報持っていないですか？」

セレスはクラウスに話を振られ、考え込む。

「魔王が復活してからというものの、魔族にはてんで動きが無い。情報なんて入る訳……」

だが、そこでセレスが目を開く。

「……待てよ。動きが無いんじゃないかって、動けないのだとしたら……」

「なるほど。魔王側も人間側と同じく一枚岩ではない、と」

セレスの言葉にクラウスが察した。

「ああ。おそらく魔王派と反魔王派で分かれているのだろう。こっちにとってはまたとないチャンスだ」

「その件の確認は、私たちベルフォート隊が行います」

「……よくわかんねえけど、何か決まったようだな。どこ行くんだ？」

俺は二人の会話に入り込み、これからの予定を聞いた。

何やら盛り上がってきたみたいだ。魔王側はあまり良い状況ではないらしいし。

「まずは」

「まずは？」

クラウスの言葉に俺は聞き返す。

「……どこか泊まるところ探さないと」

クラウドは苦笑いしながら言ったので、俺達は精いっぱい脱力してしまっ

た。
…中々締まらない仲間たちだぜ。

第5話 距離感（後書き）

キャラクター紹介？

いすみすすみ
泉真澄

勇者を先導する女性。陰陽道に通じている。陽志を兄のように慕う。
15歳。

クラウド・ベルフォート

勇者に付きそう騎士。真面目な性格。アルバレス王国騎士で、ベルフォート隊所属。20歳。

セレス・プリストル

男勝りな性格の女性。傭兵なので、いろんな情報を知っている。21歳。

第6話 核心へ（前書き）

物語が少しずつ動いてまいります。

TwitterのIDはc f f | s a k iです。

更新情報などを載せますので、よろしかったらフォローしてやってください。

第6話 核心へ

L o r d P h a s e

い、いてえ…

何なんだこの痛みはよお…

いてえ…

目が…痛え!!

俺はベッドから飛び起きた。

「はあ…はあ…」

俺は目元をぬぐう。何だかヌルつとした。

「？」

俺は拭った手を見つめた。

「げっ！」

いやな予感はしていたが、ヌルつとしたものの正体は俺の血だった。まさか目から流れていたのか？

俺は洗面台に向かい鏡を見る。

「あー…」

何故か知らないが、目が血だらけであり、頬には赤い痕が残っていた。

とりあえず目を洗い、血を流してみる。

痛みはすぐに収まり、血もすぐに止まった。

「…この痕は」

そっぴや夢の中でメグに紅茶を吹っかけられていた。

確か俺の頬にその紅茶が当たっていた。確かにそれならしょうがない。

「…」

ん？

しょうがない？

「んなわけね〜〜〜〜だろ〜〜〜〜!!」

俺は鏡の前で絶叫した。

夢の中で起きたことが、現実に影響する訳がない。

何をトチ狂ったのか、俺の口は。全く。

「うるさい。死ね」

「あ」

俺の絶叫で目が覚めたのか、凄い形相で妹が俺を睨んできた。

それに気圧され、何も言えずに固まっていたら妹が珍しく俺に質問をする。

「何そのほおの痕」

「ああ…これは…」

何ていえばいいんだろう。

俺自身もよく分かっていない。

「どうせ何かドジしたんでしょ。アンタバカだから」

ぐっ…言いたい放題言われているぞ。

何か…何か言ってやらねば。

「あ、朝飯は食べてくか？」

…俺何で妹にビビってんだろう。

「…いるかボケ」

最後まで俺に暴言を吐いていた妹。

だが見事な対応だった。これぞ大人の対応。

決してヘタれている訳ではない。

とまあ心の中で、400字原稿ピツシリと言いつつ訳を並べないと気が済まない。

妹が家を出たのを確認し、俺も朝食を食べずに学校へと向かうことにする。

いつもより早く学校についてしまい、教室には一人しかいなかった。

「ん？」

「……」

その人物は、メグそっくりの羽生巡だった。

「あー……」

まずい。目が合った。どうすればいい？

やっぱり彼女相手でも挨拶するべきだろうか。でも無視される可能性もあるしな……

だがこのまま気まずいままの空気でいられるか！ えーい！

「お、おはよう」

「……」

「う」

案の定シカトのようだ。

まあ彼女が他の生徒と話しているところなんて見たことないしな。

た、多分コミュニケーション能力に難があるに違いない！

そ、そういうことにしておこう！ でないと妹の件と言い、俺が保たん。

「お、おはよう……」

そうそう、そうやって俺に返事を返すなんて、夢みたいだ。こんなこと絶対ありえないってマジで。

「……」

待てよ。

俺はチラリと彼女の方を見る。

羽生さんもチラリと俺を見た。

「あ、い、今何か言った？」

俺は動揺しながら彼女に尋ねる。

まるで出来立てほやほやの純情カップルみたいだ。何て恥ずかしい光景だ。

マジで教室に誰もいなくて良かった……

「お、おはよう……って……ダ、ダメだった？」

「え……あ……いや全然」

あ、あれ…？

彼女ってこんな人だったっけ？

「そ、そう…良かった…」

彼女は心底ほっとしたようだ。

だがこの何とも言えない空気はなんだ？

何で彼女とこんな空気になってるんだ！！

俺はこの空気を紛らわすように、彼女に質問をする。

「その指の怪我どうしたの？ 料理で？」

俺は彼女の指先に捲いてあった絆創膏が気になって質問した。

「え？ これは昨日紅茶のカップ拾った時…貴方も見ていたでしょう？」

「あ、ああ…そういやそんなときは俺が絆創膏渡したんだっけか」

俺は思い出したかのように頷いた。完全に忘れていた。

…っておかしくないかオイ。

何で俺の夢のことを彼女が知ってる？

…か何で夢の中での出来事が現実になっている！？

どうして夢の中の「メグ」が怪我したはずなのに、現実の「羽生巡」が同じところを怪我しているんだ！？

これって偶然か…？

そんな訳ないだろう！ 彼女は俺の夢のことを知っていたんだぞ！！
じゃあ夢を共有していた？

そしたらどうして現実で彼女が怪我してるんだよ！

「な、なあアンタどうして」

「幻夜早っ！！」

「！？」

俺が羽生巡に話しかけようとしたところで、背後から声が聞こえた。
何と言うタイミングの悪さだ。

「雄介か…」

しかも下ネタ大好キングの落合雄介だった。
今すっげえ殴りたい。

「なあ幻夜。何でこの俺が早く来たか知りたくないかい？」

「ああまあどうでもいい程度には」

「ようし！ では教えてやろう」

「いやいや思い切り皮肉言っただんですがね。」

「実はな、星占いで運勢が良い奴の運勢を下げるためには早く家を出るのがいいって言ってたんだ」

「何て星占いだよ！？ なんの星占いでも何でもないし、人の足引っ張って運勢を良くしようっていう最悪な奴じゃねえか！！」

俺の運勢が確かに下がっていると実感してしまっているので、なおさらタチが悪い。

まさにこいつと同じ。

「おう幻夜はともかく、雄介がこんな早く来るとはな」
続いてきたのは、委員長の一だった。

「お前にしては遅いような」

「一ならもつと早く来ていてもおかしくはなかった。」

「いやな、何故か財布を落としてしまったな」

…星占い恐るべし。

昼休みになった。

あの下ネタ大好きキングのせいで、朝は大事なことが聞けなかった。

そこでやっと俺は自由になれたという訳だ。

とりあえず羽生さんを探してみる。

彼女は丁度教室から出るところであった。

俺は親友たちにちよつと用があると言い、教室を出て羽生巡を追った。

「なあ」

俺は彼女の肩を掴む。

「……」

彼女はジッと俺を見つめる。その瞳はとても綺麗で吸い込まれそうになる。

というか彼女ってかなり綺麗な顔をしている。まつ毛は長く、瞳も綺麗。

整った顔をしているし、髪の毛はとてもサラサラしている。

って俺は何を観察しているんだ！！

これではただの変態。奴と同じではないかつ！

俺は咳払いをして言葉を紡いだ。

「二人で話したいんだけど」

「……いいわよ」

俺は心の中でガッツポーズをしながら屋上へと向かった。

彼女が付いてきているのを確認しながら。

すれ違った生徒たちからは好奇の目で見られていたが、気にしない。地味に妹が驚いたような眼で見ていたのも確認したが、それどころではない。

俺は屋上の鍵を閉めた。

「……どうして閉めるの？」

「え？ あ、いや、邪魔入らない方がいいかなって……」

いきなりこの行動は不振だったか！？

まあ確かにいきなりは驚くだろう。フッー。

「あのさ、俺……」

「……」

彼女は黙って俺の顔を見つめる。

「う……」

そんなに見つめられると照れるからやめてほしい。さつき観察して可愛い顔してるのは分かっている。

「ああそのなんだ……」

さっさと続きを言わんかい！！

「俺の夢のことなんだけどさ……」

「え？ 将来の？」

「そうそう。俺の将来の夢は弁護士……って違うわっ！！」

俺のノリツッコミに彼女は少し驚いたようで、少し驚いていた。というかいつもの感じでツッコミを入れてしまった……

「いや夢って言っても、もう一つあるでしょ？」

「弁護士以外に？」

「そうそう。会計士にもなってみたい……ってそうじゃねえよっ！」

羽生巡。恐るべし。実は天然だったのか？

俺は深呼吸して心を落ち着かせる。

「だから寝るときに見る夢の話だよ。昨日の夢の話」

ふう。何とかここまで言えたぞ。妙に足踏みをしてしまったが、さすがにもう大丈夫だろう。

「昨日、俺は夢の中でお前とそっくりの奴に出会ったんだ」

「……」

「名前はメグ。名前は似てるし、容姿に至っては瓜二つだ。そんな彼女は昨日怪我をした。……紅茶のカップで」

俺は彼女の眼を見る。だが、彼女の眼はさっきと全く変わっていなかった。

話を続けることにする。

「彼女がどこを怪我したか知っているか？ 今のお前と同じ指だ。始めは偶然だと思った。だが……お前は俺の夢の内容を知っていた。これは偶然とは思えない」

「……つまり、夢の中に私が出てきたって言いたいってこと？」

「ああ」

「……私のこの指の怪我。もっと前からのものだとは思わないの？」
その可能性もあった。

だが。

「確かにその可能性はある。でもそれはありえないんだ。俺が前からこの指の怪我をしていたかどうかは分からない。分からないんだ。でも分からないからこそ、夢の中で現実と同じ場所を怪我するはず

がないんだ。それに、それじゃ俺の頬にある軽い火傷の痕は説明できない」

俺は自分の頬を指差す。

「貴方は、夢の中の世界を信じるってこと？」

「…到底信じられるはずがない。だが、お前と夢で繋がっているのは明らかなんだ。だから説明して欲しい。何で夢の中で起きたことが、現実の俺に影響されるのかを」

俺の質問に彼女は目を伏せる。

「オシオキ…罰はどうするんですか？」

「は？」

そういや「メグ」は何故かこの罰オシオキというのを気にしていた。

一体何なのだろう。この罰オシオキって。

「いやその罰オシオキって一体何の事だか…っていつか時間ヤバッ！」

俺は腕時計の針がすでに昼休みが終了を告げそうなところ位置しているのに気が付いた。

まさかこんなに時間が進んでいたとは。しかも何も食べてない。

「悪い。この話はまた放課後！」

「あ」

俺は彼女に振り返る。

「急がないとやばいぞ。あのヒゲ、遅刻するとうるさいからな」

俺は地味に世界史の先生を侮辱しつつ、彼女に忠告をした。

陽志と雄介はよく注意されては愚痴をこぼしていたので、言っただけ。

俺は表向き優等生だから。

こうして例の件は結局中途半端に終わった。

羽生さんも放課後来なかったし。

Hero Phase

どうやらこの世界にも慣れたらしく、一度寝ると三日間起きないとかは無くなったらしい。

おかげでスムーズに旅を進められるようになるだろう。

「で、一泊したしどこに行くんだ？」

「とりあえず西へと向かいましょう。ここらへんは人間側の勢力圏内ですので、比較的安全ですから」

クラウドは地図で西の方を指す。

「ここって砂漠地帯じゃ…」

真澄は不安そうに俺を見る。

そんな目で見られても、砂漠の怖さは俺も知らない。

まあ何とかなると思うが。

「心配するな。いざとなったら俺がおぶってやるからよ」

真澄はそんな俺の言葉に顔を輝かせた。

確かに一人だったら不安かもしれないが、仲間もいっぱいいるしな。出来るだけポジティブに考えることにする。

そんな彼らに不穏な影が迫っているのにまだ俺達は気が付いていなかった。

「ステュ様！」

「どうした？」

ステュという若い男が部下を見る。

「勇者と思われる一行はやはり砂漠に入るそうです」

「そうか。待ち伏せしておいて正解だったな。ラミアに伝えておけ。俺が勇者をやるってな」

「はっ！」

ステュという男は立ち上がり弓を持つ。

「…悪いな勇者よ。子供たちのためだ。死んでくれ」
ステュは少しだけ悲しそうな眼をしながら遠くを見る。
そして弓を引く。

「盗賊ギルド、シューティングスター出立！」
それと同時に彼は矢を射た。

第6話 核心へ（後書き）

キャラクター紹介は落ち着いてからまとめましょう。

第7話 開眼と閉眼（前書き）

調子に乗った投稿です。

今投稿しないと忘れるかも…

第7話 開眼と閉眼

L o r d P h a s e

「と言う訳で魔王様」 私と気持ちよくなりましたよ」

「何でだよ!？」

いきなりこんなところから始まっていいのだろうか。

別に超展開とかそういうものではない。ただ単に質問したらこんな答えが返ってきただけだ。

「だって魔王様はこの世界が現実に存在しているのかどうかをお悩みなのでしょうか？」

ラミアが悪戯っぽく舌を出す。

駄目だ! この人はいろんな意味で危険だ。リアルに俺の貞操が危険である。

「ならば身体を重ねることで分かることも…」

「ああああ頼むからこれ夢じゃないよな!？ こんな夢見てたら俺はマジでへこむからな!！」

俺は頭を抱えながらラミアから距離をとっていた。

「そもそも魔王様は何か不安でも抱えて？」

「不安と言つか疑問。何でこんな世界に俺いるの? とか。正直まだこの世界が存在しているのなんて信じられないんだよ」

俺の頭は再びパンク寸前だ。

何で俺がこんな良く分からないところに、しかも魔王として飛ばされているんだろうか。

「でもそろそろしつかりしていただかねば」

「ん？」

ラミアは急に真面目な顔になった。

「貴方は魔族の頂点に立つお方。さらにこの先世界の頂点にも君臨するお方になるのです。いつまでも駄々っ子では困ります」

「いやいや普通の人間は結構あたふたしますよ。多分」

「じゃあとりあえず認めてください」

「……」

俺は最後の意地として何も答えなかった。

「大体住む世界が二つになっただけです。 しかも貴方の寝ている間だけ入れ替わる。何の不都合もないわ」

「例えの話だ。こっちの世界で俺が死んだら、向こうの俺はどうなる？」

「うーん…死ぬのでは？」

俺は泣きなくなった。

ただ二つの世界に住むだけではないではないか。

「まあしょうがない。洪々だが俺は魔王やることを了承しよう。で、そろそろ俺に隠してることを吐いた方がいいんじゃないか？ 二つくらい」

俺はラミアを見つめる。

「あら？ やはりお気づきで？」

「何で俺に秘密にしていたのかも分かる」

大方俺がこの世に存在している時間が僅かだったからだろう。

「勇者のことと、反魔王派のことだ」

「分かりました。魔王と勇者のお話はすでに頭に入っているはずで」

で、分かったことは勇者が俺を倒すために旅を始めたということだ。それと、反魔王派についてだが、やはり人間の俺が魔王になるのに反対している連中がいるようだ。

その反魔王派とはどんな仲が悪くなっているらしく、最近では小競り合いまで起きているらしい。

魔王派の筆頭はラミアであり、反魔王派の筆頭はサイサリスという男らしい。

力はかなり強いらしく、ラミアも敵わないらしい。

「なので勝つためには魔王様の力が必要なのです」

「俺の…力？」

「はい。目に激痛が走ることがありませんでしたか？」

「あつたな」

前に一度…正確には二度あつた。

儀式のときと、寝起きの時だ。

「それは魔眼が解放された証明です」

「魔眼…」

聞いたことはある。ギリシャ神話に出てくるメデューサの話で。

「相手を石化させるのか？」

「いえ。魔眼には三つの種類があります。今から記します」

支配眼：相手を意のままにコントロールできる。

複製眼：相手の能力や武器をコピーする。モノもコピーできる。

入滅眼：相手の存在を抹消する。威力の加減も可能。

「…こんなものを俺はどうやって発動させるんだ？」

「普通に意識を目に集中し、何をするかで勝手に神経が後はしてくれます」

「そんな便利に…か」

だからこそ魔王の能力なのだろう。

この強大な力があるからこそその魔王なのであろう。

「それで、具体的に俺はどうすればいいんだ？ サイサリスって奴のどこにでも行くのか？」

「それは魔王様がお決めになることです。しかしまあ私が手取り足取りウフフ…」

俺は少し寒気がして一歩下がってしまった。

「い、いや俺なりに考えてみる。まずは情報を集める。それからだな、うん」

俺は執務室から自室へと下がった。

何故かあのラミアという女性、危険なおいがする。いろいろな意味で。

Hero Phase

俺達を乗せた馬車はとうとう砂漠へと入っていった。

砂漠の経験は初めてではあるが、そこまで緊張などはしなかった。

「…熱いな」

「そうですね」

真澄もうつすらと汗が浮かんできている。

「……」

反対にセレスは平然と寝ていた。本当に豪快な人だ。女性であるかどうか疑ってしまう。

ゲシッ

「痛っ」

「今変なこと考えていただろう」

「え！？」

この人もしや…エスパー！？

あんまり心の中でこの人のこと考えるの止めよう…

「…クラウス。何か妙な感じがしないか？」

「そうですね…いくら砂漠でもここまで人気がないのは…ここは…
応行商人とかも通る道ですし」

クラウスとセレスは難しい顔をしていた。

確かに何かがおかしく感じる。

「…上？」

真澄がふと上を見た。

「どうした？」

「！」

セレスの顔つきが変わった。

「窓を閉める！ クラウスは中に入れ！」

「了解！」

俺達はセレスの言うとおりに行動した。

何と、大量の矢の雨が俺達に降り注いだのだ。

真澄の「上」発言はこれのことであつた。

「チツ…やはり待ち伏せか」

「何で俺達が狙われるんだ！？」

俺はセレスに尋ねる。

「お前が言うのかそれを！？ お前を狙つて来ているに決まってるだろ！」

「俺が標的なのかよ！？」

「でも何故盗賊団が陽志さんのことを…」

真澄が首をかしげる。

「大方勇者は魔族の間では高値の賞金首にでもなっているんでしよう」

クラウスが冷静に外を見ながら呟く。

「でもあいつら…人族だぜ」

「そうさ。シューティングスターは魔族と繋がっている憎むべき連中なんだよ！！」

セレスは憎悪を露わにする。

相当魔族やそれに関連するものが嫌いなようだ。

「これからどうする？ ここにいても的になるだけだろ？」

「…私が囷としていく」

「セレス」

「危険ですよ！」

真澄とクラウスが止めに入る。

「じゃあ俺が…」

「一番ダメです！！」

真澄が俺に抱きついて断固拒否した。

「う…」

「このままじゃジリ貧だ。私が囷になるのが一番いい」

「だが」

「いいから信じるよ」

セレスが俺の頭を撫でる。

「な」

俺は恥ずかしくなってその手を払う。

「真澄さん。何か式神を貸してくれませんか？」

「はい？」

クラウスが何かの書類を急いで書いていた。

「この書状をタスタに駐留している騎士団まで式神で届けてくれませんか？増援を呼びます」

「はい！ お安いご用です！」

真澄は鴉を呼びだし、書状を口に咥えさせた。

「私が馬車を出て敵を引き付ける。その間に式神を外に放て！」

「はい！」

セレスは外をうかがう。

遠距離から攻撃してきた盗賊部隊の半分程度は、すでに刃を抜いて近づいてきていた。

「タイミングが重要だ。私が出て行つて3秒後に放つんだ！」

「はい！」

真澄も鴉をスタンバイさせる。

「行くぞ！」

セレスが一人飛び出していった。それと同時に矢が降り注がれる。

「3、2、1、スタート！」

矢がある程度振り終わった後、真澄は鴉を解き放った。

「まずは作戦成功だな」

「ふう……」

とりあえず真澄の頭を撫でてやった。

セレスにされたことをどうやら気にしているようだ、俺が。

俺は外を見してみる。セレスは確かに強い。だが、明らかに多勢に無勢だった。

「くっ…」

いくら集団戦に強い槍と言えども、近づかれると弱い。

セレスは後退を繰り返すことになっていた。

「僕も行きますよ。騎士なのにここで出ない訳にも行きませんしね」

「あ」

クラウドが出ていった。

「俺だつてこんなところでのうのうとしていられるか!!」

「暁さん!!」

真澄が俺を呼んだが、迷わずに外に飛び出た。

外に出た途端、もわつとした熱気が俺を襲うが、そんなものを気にしていらなかった。

「相手が人間でも…俺は容赦しないんだよ!!」

退魔の剣は魔族を滅する剣。

人間相手では普通の剣であるが、それでも十分な威力と切れ味である。

「こいつ強いぞ!」

盗賊の奴らが次々と後退していく。セレスとクラウドが敵を引き付けているおかげでもあるが。

「凄いです暁さん!」

真澄も式神で援護しながら戦っているようだ。

これだと時間稼ぎの必要もないかもしれない。

「!」

だが、そのとき背後から強力な気配を感じた。

その感じに俺はヤバさを感じ取った。

瞬時に前へと飛んだ。

それと同時に轟音が背後から鳴った。

あまり振り向きたくないが、向いてみると、さっきまで自分がいた場所に穴が開いていた。

しかもここは砂漠である。一体どんな威力をしているのだろうか。

「…やべえよなこれ」

それと同時に矢が俺に向かって大量に飛んでくる。

「くっ…」

俺は退魔の剣と鞘で何とかそれを防ぐ。

だが、明らかに物量で向こうが勝っていた。

「やべえ…」

俺の身体を矢が何本か掠めていく。

そのたびに身体が鈍くなってくる気がする。

「暁さん！！！」

真澄が急いで加勢しようとするが、周りの盗賊がそれを邪魔する。

「今はリーダーと勇者のタイマンなんだよ」

「タイマン！？」

真澄は驚いた顔をする。

あの大量の矢を放っているのは一人の人間だというのだろうか！？
もしそうだとしたら、とんでもない人と戦っていることになる。

「ぐっ…目が霞む…」

今頃気が付いたが、矢には痺れ薬でも塗っているのだろう。

それでも気力を振り絞って俺は剣を振るう。

「こんなところで…終われるかよ…俺に期待する人間がいるんだ…
負けられる訳…ねえ…だ…ろ…」

だが、俺の目は完全に閉じてしまい、身体の踏ん張りも効かなくな
った。

その場でうつぶせに倒れてしまう。

「陽志さん！？」

「暁！！！」

クラウスとセレスが俺を呼ぶ。

だがその声もどこか遠い。

「暁さん！！ 暁さん！！！！ 暁さーーーーーん！！！！！！

！！！」

真澄の声は良く響いた。俺に期待してくれた人なのに…俺は…

だが、結局それも遠くなり…

俺は意識を失った。

第8話 魔眼解放（前書き）

話が進み始めた… やつと

<https://twitter.com/#!/cfff|saki>

上記アドレスが私のツイッタープロフィールです。

更新が気になる方はフォローをお願いします。

第8話 魔眼解放

Hero Phase

「わあっ!!」

俺はとても嫌な汗を掻きながら目を覚ました。

まだ深夜二時。寝てから二時間しかたっていない。

…また妙な夢を見ていた気がする。

最近俺は何か変な夢を見ているような気がするのだ。

詳しくは分からない。そもそも内容を覚えていない。

ただ、とてもいろいろな意味で危険な夢だったと思う。

いったいどうしたのか。しかも今日のこの感じ…悪夢なのかもしれない。

俺は水を一杯飲みにもリビングへと向かう。

何故だか最近、まともに寝ている気がしなかった。それに、妙に体が疲れていたりもする。

「…はあ」

俺は冷蔵庫を開け、2リッターペットボトルを取り出して、水を自分のコップに注いだ。

「ふう…」

少しだけ落ち着いたようだ。これでまた眠れそうだ。

俺は目をしばしば瞬かせながら、自室へと戻っていく。

明日は朝練がある。夜更かしは禁物だ。

Lord Phase

後ろから声が聞こえてくる。

「お待ちください魔王様。護衛を付けずに外出はいけません！」

声の主は、俺の護衛部隊隊長のセシルである。

俺のそばには必ずと言っていいほど隊長の彼か、副隊長のメリクリスがいる。

監視でもしているのだろうかと思ってしまう。

「この世界のことを知るには、街に出るのが一番だと思う」

「しかし…！」

なおも食い下がってくる。

「俺は一般魔族の変装をしていく。問題はない。俺が魔王だと誰も知らないだろう」

魔王として外出すると、目立ちすぎるし、世界をよく知れないだろう。

俺は衣装を脱ぎ、飾り気のない普通の服を着た。

「護衛がいると目立つ。それでは逆に狙われる」

俺は暗についてくるなよ、と言った。この世界に来てからと言うものの、誰かが必ずそばにいて自由であった試しが無い。

「で、ですが私の任務は魔王様の護衛であり…」

「その任務は俺が…待てよ」

俺は一ついいことを思いついた。一石二鳥になる可能性もある。

「まあどうしても行くって言うのなら仕方がない」

「え」

セシルは俺を不思議そうに見る。

「護衛は目立つ。そして今から俺は一般魔族。目立たない方法があるじゃないか」

俺は黙って話を聞いているセシルを指差す。

「お前も一般魔族。今日はお前と友人として外に出ることにしよう」

「は、はい…！？」

「つまり、護衛では無く友人としてなら同行を許可すると言っているんだ」

「そ、それは…」

セシルは考え込む。そして頷いた。

「解りました魔王様」

「解っていないみたいだが」

「え？」

セシルは再び呆氣にとられる。

「セシルは友人を様づけで呼ぶのか？　　というか俺は魔王じゃない
って言っているのに」

「では何とお呼びすれば…」

俺は少し考え込む。「月影幻夜」だから幻夜でもいいが、普通すぎる。

そっぴゃ「羽生巡」は「メグ」だった。俺もそれにちなんで「ゲン」
にでも…微妙だ。

「じゃあゲンヤで」

「わ、解りましたゲンヤ」

まだカタコトっぽいけど、次第に慣れてくるだろう。

こうしてセシルは俺のことをゲンヤと呼ぶようになったのだ。
しかし、体面もあるために、みんなのいる前では様付である。

「んじゃ行くか」

「はい、ではなくて…ああ」

俺とセシルは城の外へ出た。

俺にとっては初めてのことで、結構興奮する。
一体どんなものが待ち受けているのだろうか。

Guarder Phase

魔王ゲンヤとセシルが城を出てから数分後、羽生巡が魔王の執務室

を訪れた。

「魔王様」

メグは扉をノックし、さらに声もかけるが、当然返事がなかった。

「魔王様？」

メグは扉を開けるか開けないか迷っていた。開けたら無礼に当たらないだろうか？

実は寝ているのでは？ など様々なことを考えながら、扉の前で立ち尽くしていた。

「あれ？ お前確かラミア様とこの…」

「あ」

ぼうつと突っ立っているメグに話しかけてきたのは、工作部隊「トリック」の隊長で、魔王の護衛副隊長のメリクリスの兄、リカルド・モルフィールだった。

「魔王様探してんのか？」

「え、ええ…」

メグにとって、トリックの隊長はかなり格上の存在。緊張してしまうのは、無理もないだろう。

「魔王様はな…」

「魔王様！！」

リカルドが話そうとした矢先、遠くからその妹の声が響いてきた。

「おお、麗しき妹！」

「死ね。魔王様はいらっしゃる？」

メリイはいつものように兄に罵声を浴びせた後、魔王の所在を尋ねた。

「いや、今は不在だね」

「…」

メグは少し落ち込んだ顔をする。

「不在？ どういうこと？」

対照的にメリイは顔を歪ませた。

「そのままの意味さ。一般魔族に変装して街の見回りをするらしい。

いやーあの変装だったら僕様以外誰も気づかないだろうね」

「！？ 何で止めなかったのバカ兄！！」

「いやいや、魔王様のしたいようにさせるのも部下の…」

「新たな情報が入ったのよ！ この街に反魔王派の刺客が侵入して
るって！！」

「！！！！」

メリイのこの言葉に、メグもリカルドも血相を変える。

「もう使えないバカ兄なんだから！！ その貴方！」

「は、はい！」

メグはメリイに指さされ、ピンと背筋を伸ばした。

「貴方はラミア様にこのことを伝えなさい！」

「は、はい！！」

メグは少し動転していたが、気は確かに持ち、廊下を走っていった。

「バカ兄は兵を連れて刺客のあぶり出しをお願い！」

「お、おう！」

本来立場的にリカルドの方が偉いはずなのだが、妹の方がしっかり
しているので、素直に命令を聞くリカルド。

「だがセシルも一緒だ！ 襲われてもそう簡単にはやられないさ！」

「それなら少し安心できるわ。私は軍を連れて…」

「おっと、それは止めた方がいい」

だが、珍しくリカルドが真面目な顔をする。

「どうして？」

「そんな物々しく行ったら、刺客どもに魔王様の居場所を教えるだ
けだ。あの変装だしな、すぐには見つからない。お前は数名の兵を
連れて、行くんだ。魔王様の探索もこつちがやる」

「バカ兄にしてはいい意見ね」

「さすがに魔王様の命が掛かってるからね…慎重になるさ」

リカルドはどちらかというと、臆病な性格をしている。

そうして、兄妹二人は頷き合ってそれぞれの持ち場へと急いだ。

刺客騒動のことなど知らずに、幻夜とセシルの二人は街を悠々と観察していた。

「…出来れば女性とが良かったかな…」

「何か言ったか？」

セシルは俺の小言が聞こえたらしく、少し不機嫌そうな顔をする。そしていつの間にかため口。セシルは元々付き合いの良い人間で、ノリも良かった。勤務中はいたってまじめで礼儀正しいのだが。

「いや、何でもない」

「…俺も女性と一緒にの方がいいと思ったからあいこだな」

だがセシルはそんなふうな冗談を言くと、軽く笑った。

なんだ…魔族、魔族って言っても普通の人間と変わらないじゃないか。

少し身体的特徴が違うだけで、こうまで対立してしまうとは…

「ん？」

そんな俺はふとあるものを目にした。

「ガキはすっこんでろ!!」

「うるせー！ 姉ちゃんに触るな!!」

「ルーク！ お姉ちゃんは大丈夫だから…」

「そうだそうだ。このハンパもんの女をわざわざ俺様達が見染めてやってるんだからな！」

女性一人が、ガラの悪い男たちに連れ去られそうになっており、弟と思われる男の子が彼らに抵抗していた。

明らかに目立っている行為なのに、街の人たちは気にも留めていない。

「悪いセシル、荷物持ってきてくれ」

「え？」

俺はセシルに荷物を渡して、目的の方向へと走る。

「ちよつと！！」

セシルも慌てて後を追う。

「おい。そこで何やってる」

俺は、男たちに話しかける。

「ああん？ 何だデメエ？」

「正義漢ぶってるつもりか？」

「何やってるって訊いてるんだが」

少し怖いのが、それを押し殺して再び尋ねた。

「俺がこの女を買い取ってやったんだよ」

「嘘付け！！ お金出してない癖に！！」

「あんだと！？」

…ちつ。人買い…いや、魔族買いしようとしてたのか。

どちらにしろ胸糞悪い。それについて何も悪く思っていないこいつらも、見て見ぬふりしてる街の人たちも…

「ハーフ魔族に払う金なんてねーんだよ！！」

「何だと！？」

「お前らは魔族の法律では、権利なんて何もないのは知ってるだろ？ どういうことが分かるか？」

「わかんねーよ！」

男たちとハーフ魔族の弟の言い合いは続く。

だが、それをさすがに俺は見えて見ぬふり出来なくなった。

何故なら、男が刃物を取り出したからだ。

「なぜなら…殺しても罪にはなんねーからだ！！」

「うわああああ！！」

「ルーク！！」

姉弟の悲痛な叫びが俺の耳に入る。

「よせ！！」

俺は二人の間に割って入る。

それと同時にナイフの刃が俺の右肩に刺さった。

「ゲンヤー!!」

セシルが駆け寄ってくるが、俺はそれを左手で制止する。

「…消えろ」

「あん？」

「今すぐここから消えろ！」

「!!!」

俺が男たちの眼にそう叫んだと同時に、彼らの身体はピクリと動かなくなった。

そして。

「了解しました。魔王様」

彼らはみんな一目散にその場を去っていった。

「ゲンヤー！ 傷は!？」

セシルが駆け寄ってくる。

「大したことはない」

俺は肩のナイフを抜いた。

血は出ているものの、魔王の力か、すでに止血され、傷口もほとんど見えない。

「俺がいながら…魔王様を…」

「その名を言うな」

と言うのはすでに遅かった。

何せ、先ほどの男たちが自分をそう呼んでしまったからだ。

おかげでここはちょっとした騒ぎになってしまっている。「魔王」
のことで。

それにしても、魔王だと自分は名乗ってないし、彼らも知らないはずなのに、何故そう呼んだのか？

「…どういうことだ」

「あの…」

「ん？」

俺が思考のループに入りそうになった時、ハーフ魔族の姉の方が俺

に話しかけてくる。

弟は、姉の後ろで俺を睨んでいた。

「助けてくれてありがとうございます」

「いや…感謝されるほどのことは」

「そうだよ姉ちゃん！　だってこの人…魔王じゃないか！　俺達が苦しんでる元凶だ！！」

「…」

そういえば、先ほど男たちは言っていた。

ハーフ魔族には権利が無い。つまり、殺されても罪には問われない、と。

そんな法律を作った魔族を彼は憎いのだろう。

そしてそれは俺だと思っているのだろう。

だが、俺が魔王だとこんな街中で噂され、騒がしくなってきた。つまり、目立ってしまった。

「俺は君たちにとっても興味がある。少し付いてきてくれないか」

「ゲンヤ…」

「セシル。後できちんと話してもらうぞ。俺は怒ってるんだ」

「…分かった」

俺は憤りを押し殺してセシルに囁いた。

「つ、付いていったら俺達を殺す気だろ…！！」

弟の方はなおも俺に噛みついてくる。

相当魔族のことが信用できなくなっているようだ。

「いや、だから俺は…っ！？」

そのとき、俺とセシルは嫌な気配を上空から感じ取った。

俺、いや俺達に向けられる明らかな殺意がそこから感じ取れた。

「セシル！」

「了解！」

セシルを呼び、ハーフ魔族の弟の方をセシルに預けた。

「な、何すんだ…！」

弟の方が文句を言っている間に、俺はハーフ魔族の姉の方を抱えた。

「悪いな、しっかり掴まっけてくれ！」

「あ、はい」

俺とセシルは、二人を抱えて急いでその場を離れた。

それと同時に、俺達が元々いた場所に弓矢の雨が注ぎ込まれていた。一秒でも遅れていたら、俺達はハリネズミになっていたかもしれない。

「間一髪だったな」

「あ、あの…」

「悪いな。話は後回しだ」

俺が抱えているハーフ魔族の姉の方が俺に話しかけてきたが、俺はその場から急いで離れる行動を優先した。

「ゲンヤ、ここは危険だ。俺に任せてくれ」

「いや、狙われているのは俺だ。俺一人じゃこの二人を守れない」

俺は自分が抱えているのと、セシルが抱えている二人のハーフ魔族を見る。

「お前に二人を預ける。この二人を城まで連れて行ってくれ」

「ちよつと待て。俺はお前の護衛をして…」

「大丈夫だ、そう簡単に死にはしないさ。それよりも二人を城まで連れて行ってくれ。これは命令だ」

「ぐっ…すぐに戻ってきます」

セシルに姉の方を引き渡し、俺はセシルと逆方面へと走る。

そうして、再び俺に矢の雨が降り注ぐ。

「本当にこういうとき、魔王の身体でよかったと思うな」

攻撃を避けながら俺は悠々と語る。魔王の身体は、明らかに学校で生活しているときよりも身体能力が向上し、相手の気配まで敏感に感じ取れるようになっていた。

まあ魔王じゃなければこういうことも起きないのだが。

「さて…」

俺は武器を持っていないし、魔法も知らない。だから攻撃手段はほとんどない。

「どうするか…」

このまま攻撃を回避し続けるのも、中々疲れてしまう。そんなとき、ラミアの言っていた魔眼について思いだす。

「確か3つあるって言ってたな…」

相手を操るのと、解析・複製するのと、存在を消滅させる奴があったはずだ。

3つ目は良く分からない分危険に感じ、1つ目は相手の居場所を絞り切れないので使えない。

ならば…

「確かめてみる価値はありそうだ！」

俺は目をつぶって先ほどの相手の攻撃を思い出す。

そして解析するんだ。あの攻撃を。

俺が立ち止まったのを見て、相手は再び弓の雨を降らす。

この弓の雨は…魔法！

俺は目を見開き、右手を降り注いでくる弓の雨に翳す。

「複製…完了！」

俺の右手からも弓の雨が射出され、相手の弓の雨と相殺させる。

どうやらこれが複製眼というものらしい。

だが、これは俺の身体に相当な疲労感を与える。

どうやらまだこれを使い続けるには、慣れが必要らしい。

「はぁはぁ…」

次の攻撃は避けられないかもしれない…

俺は再び降り注いでくる弓の雨を見てそう感じた。

「魔王様—————！！！！！」

「お」

「だぁぁぁぁぁ！！！！！」

俺の目の前に護衛副隊長のメリクリスが現れ、弓の雨を一薙ぎする。

「魔王様！ ご無事ですか！？」

「君のおかげで何とか」

「ほっ…それは良かったです…」

彼女は一安心して、胸をなでおろした。

「今、兄の部隊が刺客を追っているの、もう大丈夫です。ところでセシル隊長は？」

「セシルには俺が任務を与えた。問題ない」

「そうですか。とりあえず城まで戻るとしましょう」

「ああ」

俺は彼女と共に城へと帰還する。

その際、セシルと入れ違いになってセシルが街中を俺を探して走り回るのはまた別のお話。

Hero Phase

気が付くと、見慣れない場所に寝かせられていた。

一体ここはどこなのだろうか。

俺は上体を起こす。

「いたたた」

思わず体中を抑える。俺の身体は包帯でいたるところが巻かれており、明らかに重傷の域に達していた。

どうしてだろうか…？

俺は先日の砂漠での戦闘を思い出した。

「あれか…」

あのとき俺は死を覚悟した。

圧倒的な強さに、俺は何も出来なかった。

その後は…

「あら？」

「ん？」

そんなとき、俺が寝ている部屋の扉が開かれ、一人の女性が入ってきた。

「目が覚めたのね」

第8話 魔眼解放（後書き）

生徒会な日々という小説を書いていたのですが、
文章の多くが、主人公のツッコミという事実には気が付きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7633n/>

エスタディア - 月に照らされた世界 -

2011年10月5日17時15分発行